

統一

第百一十一號要目

- 勸信要義(承前)……………本多日生
- ▲宗教家大會に對する意見……………全
- 御書時代の信念……………古定賢正
- ▲時局に對する宗教家の運動……………記 者
- 思連記(承前)……………日達上人
- ▲朝鮮傳道論……………記 者
- 日蓮大聖人(第十五回)……………關田佛城
- ▲日蓮宗の迷信的崇拜物……………高鍋玄洋
- 慶長宗論批判……………文學士辻善之助
- ▲迷信に就て……………藤崎通明
- 本尊に向ひし時の一念……………木村義明
- ▲各地教信……………
- 新日蓮記鶴岡卷……………古定不新

(明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可 每月一回十五日)
(全三十七年六月十五日發行統一第百一十一號)

(明治二十七年三月廿四日第三種郵便物認可 每月一回)
(全三十七年五月十五日發行統一第百十號)

御

籙

附

そ

小

人形 道具

武

者

東

羽

人形

子

形

板

御注文に依り調製致候

東京日本橋通り十軒店

久月本店

中原福藏

(電話本局二千三百八十二番)

廣告

自今編輯事務も左記にて取扱ひ申候間原稿通信等凡て全所宛にて御送附を乞ふ

東京淺草區南松山町

統一團

移轉

北澤活版所

右移轉仕候に就ては工場も充分整理仕候に付一層廉價迅速に御用相勤め可申候間何卒倍舊の御引立を奉願上候

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす

一本誌は一冊六錢 十二冊前金六十五錢 郵券代用は一割増但五厘切手を其とす

一請讀申込の節は住所姓名を附書にて認めらるべし

一爲替局は淺草區北松山町として御振込の事

一本誌は別に領收書を發せし但し領收證を要する向は返信料を封入すべし或は爲替振込の節携渡通知料或は振出郵便局へ納付すべし

一廣告料は五號活字廿七字詰每一行金八錢なり

明治卅七年五月十五日印刷發行

發行所
編輯人 井村 恂也
印刷人 山根 顯道
印刷所 鈴木 暉學
北澤活版所

東京市淺草區南松山町四十五番地

發行所 統一團

發行所東京市淺草區南松山町四十五番地

夫れ世間の蓮華は夏開て冬開かず淤泥に生じて陸地に生せず風に
もまれ浪に沈み水に閉られ炎に萎む、但佛性の蓮は然らず三世不
變の花なれば春夏秋冬に常磐なり、遍一切處の蓮なれば六趣三有
に偏く開けたり、善惡一如の蓮なれば惡業の厚薄をも撰ばず、邪正
不二の花なれば煩惱の淤泥にも生長す、十惡の風にも壞られず、
五逆の浪にも沈まず、紅蓮の水にも閉られず、焦熱の炎にも萎ま
ず、此の如き佛性の蓮を我も人も持ち奉りながら、無明の酒に酔
て心内の佛性の蓮を知らず、煩惱の闇に迷て我性の眞如を知ら
ず、蓮華坊御書の一節

(歐舞鼓座に演じたる泰西外氏作の「日蓮上人社説法」中の蓮華問答に於ける修評の資料となしたるもの)

支 義

勸 信 要 義

本 多 日 生 口 述
山 根 顯 道 筆 受

第十二節 佛陀の慈悲を基礎となせる諸種の勸信説

前節に於て述ふるが如く、法華經は智惠門の實相教たると同時に、亦慈悲門の實相教なり、實に二門の實相を開示するのみならず、智慧一体の秘妙を宣説し給へり、是れ實にこの經の諸經に超勝せる所以にして、復將に來らんとする宗教研究上の高等なる批判に於て、優勝の位置を占め、且之を社會民衆の上に施すに於て、圓滿なる効果を結はしむることを得るは此間の教義に因由す、畢竟宗教の發展は、智慧に關し、周足せる根本的意義に達せば、茲に終局を告げたるものと謂ふを得べく、又社會の進化も、正當なる智慧二面の發展を希求し、而して智慧一体の域に達しなば、復以て満足を表して可なり、果してこの智慧一体の秘處に達到して宗教を解し、又社會の進運を此意義に於て、啓發指導せば、今日の文明に比して、數等光輝ある文明を現出すべきや必せり、法華一實諦の妙教

は、之を人世に施しては、濟世利民の聖化を與へ、之を出世間に用ゐては、究竟菩提の妙利を獲せしむ、寔に圓妙深絶の教法たるなり。

佛教には慈悲を稱説すること、實に廣くして且深し、諸經諸部に於ても廣く之を説示せり、然れども佛陀論に在りて、三身即一の妙旨を領會せざるが爲めに、三身を縦に論じて、法身の理先つ在り、次に報身の智發し、後に應身の慈悲生ぜりとす、故に慈悲の根本的實在を確認するに至らず、迹門涅槃及天台に在りては、三身即一を説き、この縱横并別の失を脱すと雖も、而かも正在報身と論じて、智身を取り、且この自受用報身の自受法樂なるものは、自行の空中に歸して、時に緣に應じ慈悲の發動するものとなせり、尙ほ子細に之を研討するに天台に在りては報智も亦法身の理に基きて生起したるものにして、境智を發するの邊を取り、この境則ち法性の妙理を指して第一義となし、理本事迹と判して、報身の事佛は法性妙理に對する時は、迹身となせり、迹身とは根本的無始實在にあらざるの意なり、天台智者は本迹の感應妙神通妙等を論するの時に於て、詳かに慈悲の尊重なる所以を説き給へるが故に、之に由て慈悲の性質價值等を領知するを得ると雖も、智者の結論は、理本事迹に在ること、三大部全編を通じて極めて明白なれば、如何に之を詳説するとも、終に本無今有の慈悲に歸し、慈悲に於ける根本的意義を闕失し、隨

て諸種の解釋に多大なる關係を及ぼし、往々法華本門の妙旨たる本有無始の大慈悲を滅没せしむるの過患を生ぜり、是れ本迹の差台當の異に於て、鮮明なる識別を有せざるもの、罪なり、罪智者に關らざるなり。

已上述べたるが如く、諸經諸部は三身即一の旨致すら談らず、本有の慈悲に至りては、夢にだも解せざる所なり、迹門と涅槃と天台とに至りては、三身即一を説き、慈悲の解説殆ど餘蘊なきに似たり、而かも尙ほ理本事迹の見在りて、本有常住の慈悲に於ては、義闕くる所あり、是れ聖祖日蓮大聖人が一代の識見と無限の慈愍とを傾倒したる、唯一の聖判、開目抄に於て、銳利なる筆鋒を振ふて、報應顯本の主義を喝破し給へる所以なり

開目抄上卷 迹門十四品。一向同三爾前二、本門十四品。除三、涌出壽量、二品、皆有二始成、雙林最後、大般涅槃經四十卷。其外法華前後諸大乘經、無一字一句、雖說法身、無始無終、不說應身報身顯本。

本化獨得の妙判、正しくこの報應顯本の主旨に在り、先師日受上人謂へるあり、宗祖の自解佛乘の妙旨は、三身即一に於ては應身論三にあり、一体三寶に於ても、亦三身即一の應身に約して、之を論するにあり、此旨を以て諸御書に對向するの時、逐一この開目抄に會合し難きの判あり、小子須らく知るべし、無始事常住の事の一念事の三千を判することは、正

しく開目抄に在り、故に之を模範として以て十法界抄將た本尊鈔を拜し、又この三鈔を用ひて、以て之を諸御書の本意と定むべき也、而して諸餘の祖判の如きは、或は用ひ、或は用ひず、或は隨義轉用、或は台祖内鑑の邊等也、嗚呼明快なる哉受師の指教、この指教は寔に上聖祖の正意を照了するの巨燈、下宗論の葛藤を裁斷するの莫耶なり、凡う宗學の蘊奧を極めんと欲するの君子は造次にもこの指教を閑却すること莫れ、これ實に顯本の學則の正令なり。

開祖日蓮上人壽量品の妙旨を提供して曰く
宣三身即一之應用、顯三塵點久遠之大悲、
先師日蓮上人之を消釋す、曰く法華圓極の三身は、法体法爾として相即互融す、故に三身即一と云ふ、然るに今長壽壽量の功德を顯すことは、正しく三世益物の應用に在り、故に即一の三身に於て、別しての應を擧ぐる也、當に知るべし、今經に歎する所の久成の遠壽は、正しく修成の果徳を指す也、若し諸部の圓教及ひ法華迹門等に歎する所は、但法身實相の理体也、然るに諸部の圓門何ぞ三身相即を明さらん、又何ぞ修成の果佛を明さらん、但久成にあらざれば修成功なし、今日一代の化益廣しと雖ども、久成の利物に望むるに、十方三世無量番々の中の、但今日一番の垂迹化益なる而已、故に諸經に歎する所の常住不滅は、但法身理体の常住にして、修成報應の三世常住無しと、已上は「宣三身即一之應用」と

の上一句を釋す、
次に「顯三塵點久遠之大悲」との文を釋して曰く
一代所説の諸佛菩薩の化他利益は、廣大無邊なりと雖ども、而かも今の久成三世益物の大慈に過たるは無し、大悲經に譬を良醫の父子に取り、専ら此慈悲を顯す、記の一(末丁)に云く本迹皆慈悲に由らざることを莫し文、故に久遠已來周遍法界の横堅の益物、皆悉く本佛の大慈悲に由らざること無しと」
正令堂々々の撰一なり、些の葛藤を容さず

觀心本尊鈔總結の聖訓に曰く
佛起大慈悲、妙法五字、袋内裏、此珠令、懸末代幼稚ノ類、
先師日蓮上人曰く、無解信唱の行者は、但一心不乱に、自他不二の他力大慈大悲の本願を頼むの一途に在り、必ず他の信不に拘はるること勿れ、若し台判の理本事迹の法門の如きは、則ち昔迹本所説の十界を用ひて、以て無明緣起の法に攝す、然るに宗祖は但本因果の所顯を用ひ、以て無始の佛界緣起の十界を推し、還て之を釋尊一佛の佛界緣起の十界に攝す、是れ則ち台當異目の大綱の根元也と。

正令堂々々の撰一なり、些の爭競を容さず
壽量品に云く
譬如良醫、智慧聰達、明練方藥、善治衆病、乃至此子可憐、
神方品に云く
如來一切所有之法、
如來一切自在神力、
如來一切秘要之藏、
如來一切甚深之事、
天台智者大師曰く
文殊所説、則約三行次、神力、結要、則約三教次、
先師日蓮上人曰く、但事理一体の事は、事がまゝに事を具する、果上の淨用化他三千赴物の法体を用ひて、以て下種の法体となす、故に神力の付屬も、亦末法無解信念の本門の直機の爲めに、但壽量所被の横入下種の法体を用ひて、直に之を結要し、以て本化に譲る耳、若し自在の神力にあらざれば、何ぞ化他の徳と成就することを得んや、是れ則ち釋尊教を起すの次、我等信を起すの次也、小子必ず神力付屬の教次を將ひて、以て壽量の所顯を窺は、兩品俱に佛界緣起の法門なること明白也と、

先師日蓮上人曰く、甚久遠永々無窮の形聲の利益、即是れ本地所成の三千妙事の大功德也、この功德の三千を以て、題目の法体となす、
正令堂々々の撰一なり、些の謬亂を容さず

前來記述する所に依りて、本門壽量の顯本の正旨を領會し、聖祖獨歩の教觀の秘處を開拓し、開祖已來先師上人傳之不謬の正令を辨認して、以て本有常住の三身即一の應身為正の旨趣を承知し、且つ應身為正の旨趣は、本有常住の慈悲を發揮するに在るを會得し、而してこの本有の慈悲を開示し給へる所、是れ全く佛教の生命にして、法界實相の最深秘處たるを信知すべし、一たびこの信知を得ば、又決して擾々の説紛々の議に惑ふなきを要す、受師が他の信不に拘はる勿れと云へる心地に達し安住するを以て妙訣となす。

若し一たびこの妙訣に達し安住するを得ば、現當の素願、決定として成辨せん
若し一たびこの妙訣に達し安住するを得ば、宗學の精醇、恣まゝに飽滿するを得んかな
若し一たびこの妙訣に達し安住するを得ば、門下異端の論議を解決せんこと、利刀を執て瓜を割くが如けんのみ、
若し一たびこの妙訣に達し安住するを得ば、台當の差相、像末の化異、菴羅果を掌中に轉するに似たらんのみ、
若し一たびこの妙訣に達し安住するを得ば、迷門涅槃の文義を殺活するのみならず、一代聖教その手中に飯し、條然として飯趣を得てんのみ
若し一たびこの妙訣に達し安住せば、異教異見を案排し裁斷すること、自在無礙にして、正鵠を失せざること、磁器を

手にして東西を辨し、手指を以て大地を指すよりも易し、

大般涅槃經梵行品に云く
善男子唯四無量、能令善薩增長具足、六波羅密、其餘諸行、不必修、爾、善男子、菩薩摩訶薩先得世間四無量心、然後乃發阿耨多羅三藐三菩提心、次第得出世間者、善男子因世無量、得出世無量、以是義故、名大無量
若於一眾生、不生瞋恚心、而願與彼樂、是名爲慈善
一切衆生中、若起於悲心、是各聖種性、得福報無量
設使五通、仙、悉滿、此大地、有自在、主、奉、施其所安、象馬種々、物、所得福報、不如下修、一、慈、十六分中、一
善男子一切聲聞緣覺諸佛如來所有善根、慈爲根本、善男子菩薩摩訶薩、修慈心、能生如是無量善根、所謂不淨、出息入息、無常、生滅、四念處、七方便、三觀處、十二因緣、無常等觀、煖法、頂法、忍法、世第一法、見道、修道、正勤、如意諸根、諸力、七菩提分、八道、四禪、四無量心、八解脫、八勝處、十一切入、空無相願、無諍三昧、知他心智、及諸神通、知本際智、聲聞智、緣覺智、菩薩智、佛智、善男子、如是等法、慈爲根本

若し有人 問 誰は一切諸善の根本、當言慈是
慈即如來、慈即大乘、大乘即慈、慈即如來、善男子、慈即菩提道、菩提道即如來、如來即慈、善男子、慈即大梵、大梵即慈、慈即如來、善男子、慈者能爲一切衆生、而作父母、父母即慈、慈即如來、善男子、慈者乃是不可思議、諸佛境界、不可思議、諸佛境界、即是慈也、當知、慈者即是如來、善男子、慈者即是衆生、佛性、如是佛性、久爲煩惱之所覆蔽、故令衆生不得親見佛性、即慈、慈即如來、善男子、慈即大空、大空即慈、慈即如來、善男子、慈即虛空、虛空即慈、慈即如來、善男子、慈即是常、常即是法、法即是僧、僧即是慈、慈即如來、善男子、慈即是樂、樂即是法、法即是僧、僧即是慈、慈即如來、善男子、慈即是淨、淨即是法、法即是僧、僧即是慈、慈即如來、善男子、慈即是我、我即是法、法即是僧、僧即是慈、慈即如來、善男子、慈即甘露、甘露即慈、慈即佛性、佛性即法、法即是僧、僧即是慈、慈即如來、善男子、慈者即是、一切菩薩無上之道、道即是慈、慈即如來、善男子、慈者即是、諸佛世尊無量境界、無量境界、即是慈也、當知、是慈、即是如來、

圓慈を説くこと、眞を極め善を盡せり、讀誦數回、恍惚とし、躬佛前に詣で、大慈の妙音に接するの感あり、復身塵

實に在るを覺へず、

(慈悲勸信の一節更に次回に亘りて述べべし)
(前號三頁の下段五行痴闇は破關の誤植)

大日本宗教家大會に對する宗門の態度
を一定すべき件に就て神田錦輝館に於て發表せられたる本多日生氏の意見

私は此第一號案には替同を表するものであります、態度を一定するといふ事は極めて大事のこと、考へて居るのであります、然し何の程度に於て一定するかといふ事は問題でありふと思ひます、私は程度問題に就きましては是は此日蓮宗の術語を以ていへば所謂悉檀的に贊同してよろしいと考へます、悉檀的と申しますことは此世の中の狀態に就いて即ち時代の語を以て申しますれば、時機の宜しさに隨つて贊同を表したならばよろしいと考へるのであります、元々露西亞が主張したる宗教の異同人種の異同點、其に就て歐米人の贊同を表する様に、おしざまに日本の國を申して居ることは元來理由なきことで、即ち愚なる主張であらふと思ふ、其ゆへ歐米の人民が判つて居る人ばかりで御座いますれば此露西亞の主張は何の反響ももたないので御座います、けれども何れの國で

も宗教に就きては種々の迷信があり、あるひは執拗固陋の性質の附帯して居るもので御座いますから、此露西亞の主張が或はそれらの人々に何等かの反響を有つかといふことを憂慮して、うらして日本の宗教に關係ある人若くは宗教に直接關係が御座いませんでも、宗教の問題に就て國家を憂る人々が相寄つて此十六日に日本の宗教家の公明正大なる襟度を中外に發表し様といふのでありますから、元來が理由なき主張に就て餘り智識の發展しない人々が迷ふといふ其蒙を啓發する運動であります。若し露米人の情態が此宗教に對して進歩せる思想を以て居れば宗教の思想が完全に進歩して居ることであれば露西亞の主張は何等の反響を得ずして自ら消滅するのである。或者は問々此等の主張に動かされるといふことを考へて其蒙を啓發する爲に、日本の宗教家及び宗教の考へを以て居る人々が會合してさういふ、主張に感ぜられん様に、其蒙を啓發してやることの會合である。私は考へます、さうしたならば第一義の上に於ては元より根本より斯の如きことは成立しないのである、退て考へて御覽なさいとの宗教であるといふて人種の異同に依てさうして他人種を抑壓し様といふ考へは恐らくはありませぬ、夫は人種に關係して居る宗教猶太人は人種の關係で他教徒よりは猶太人は特に勝れて居るといふ説も籠て居る場合がありましやうが、佛教とか耶蘇教とかいふ様な此偉大なる宗教の上に於ては少しく考へのある人は決して人種

の異同に依て、宗教家が他を追害するが如き行動は是認せぬことである、別段此點に疑を抱くことは少しもありません、亦宗教家たるものは自己の信仰の外に人道のため正義のため盡さなければならぬ、公道博愛のために盡さなければならぬといふことは、少しく宗教の上に就て考へて居る人は何人でも承認して居る事でありまして、夫を事實上に現さんとして皆努めつゝある今日で御座いますから別にこの度の問題に於て日本の宗教家が集て意見を交換することは第一義の上では要らぬと思ふのである、(拍手大喝采)

其要らぬが要るといふのは、彼の露西亞の主張に動かされるものが間々ありますのみならず、此宗教に就ては露米人は非常に過敏なる神経を以て居るといふものは何でもない事が非常に彼の氣を刺戟して居るのであります、一例を申しますれば近頃或人が「繪はがき」を造つた夫には露西亞の皇帝が神様に自國の戦勝を祈つて居る處であるのであります處で、神様は「あかべ」をしてやつて居る處を描きました處で、其「繪はがき」を携へて或人が日本はさういふことをやつて居るといふて亞米利加人に見せました、夫を見た亞米利加人のいふに斯ういふ様に露西亞の皇帝が祈つて居るは宜しいが神様が「あかべ」をして居る處を描きあるは此は則ち我々の信する神を侮辱して居るのである實に不都合であるといふことで、やかましく調べたといふことである此は日本人にあつては何の

考へなく一の滑稽畫としてやつたのでありませうが、宗教の觀念に富み且つ熱して居る露米の人々には容易ならんことでありませぬ、依て今度の宗教家大會の事は彼等の過敏なる神経を緩和する其過敏なる神経を和げ、さう僅かの事にびく／＼心配せんでもよろしいといふ行動であらふと思ひます、して見ればさういふ問題に就て我日蓮宗が別段教義とか第一義の上から考へてさうであるとかさうであるとかいふ深いことではないと思ひます、故に我は國を思ひ正しき文明の民である宗教上に就ても度量を備て居るといふことを列國に知らしむるに過ぎんから、其事に就ては異存なくなるべく抱負を大にし、胸襟を開て立派な大國民であるぞ宗教の上でも世界の美なるものは悉く夫を探て以て我日本の國民に其教をば所謂同化せしめて日本の爲になるやうに世界の宗教を悉く調整し悉く吸集し様といふ考へを持て居る國であるといふやうなことを彼に知らせる爲と思ふ、夫故、之に就ては別段深い議論を有しない、唯日蓮宗は宗義に熱心なる餘り僅の問題に就ても根本より解釋せんとする爲に御承知の通り彼の秀吉の大佛供養から非常に軋轢を來し永く宗門を肅したことがあるが、今度此時事問題に就てさういふ弊害が惹起してはなりません、斯かる問題に餘り立入て彼斯れいふと却て將來の爲め永く軋轢をすることになるかと思ひます、斯る問題は畢竟時事問題であつて世界悉極的の行動であるから、其悉極的の意見に於

て私は賛成して宜しいと考へます、(拍手)
 則ち要言すれば、この日本宗教家大會に對する我宗門の態度は世界悉極的に於て此第一號案を決議あらん事を希望するのであります、(拍手大喝采)

研 究

『御書』時代の信念

其 一

彼の叫びの聲を聞かずや、彼等の多くは今や悶へつゝ疑ひつゝ、而して救を求めつゝあるにあらすや、現代文明が貢獻したる人生の飾りはげに光あるものなれども、ろが内界的生活は殆んど黒き幕を以て掩はれたり、激烈なる生存競争に失敗したる徒は知識欲に満腹したる徒と相携へて、今や殆んど心靈上の危機に瀕せり、人は終に科學哲學に満足せずして天に向て叫びつゝあり地を馳りて求めつゝあり、而して彼等は斯の如くにして終に人生に於ける二重三重の扉を打破りて宗教の光を仰きたりき。

願ふに今の教壇に立ちて信念の修養につとめつゝあるもの一二にどゞまらざるべし、而も吾人の注意をひくものは彼の故清澤滿之氏の遺れがたみなる精神界一派の信念論と、近角常

觀氏の主張にかゝる實驗派の信念論也。精神界派の信念論も實驗派の信念論も皆新らしき形式を以て打て出でたる事にて、彼の教權派若しくは純理派の信念論の形式と日を同ふして論すべきものにあらずして、思辨的欲求にあきはてたる思想界に向ては確に手答ある信念論也。煩瑣なる學解を超越して尤も直覺的に救の聲をき、得るは純理派の信念に於て到底見る事を得ざる特色也、壓迫せる信條を蹴つて自由なる宗教思想の下に信の道に入り得るは到底教權派の信仰に於て見る事を得ざる特色也、さりながら人格的如來の實在は二派を通じての主張なるか如し、大能といひ靈能といひ宇宙の實體といひ其呼聲を異にすれども結局同一也、吾人は二派の信念論が其主体的方面に於て説明の形式が深刻鋭利なるを喜ぶと共に、其客体的方面に於て從來の形を改めずして打て出でたるは少しくあきたらぬ心地する也、斯の如きはハルトマンの所謂屋根を造らざる建物ともいふべき也。

さもあらばあれ現代教壇に於ける二派の信念論は深き淵に沈まんとしつゝある人間の心靈界をてらせる暁の明星也、特に教權派の壓迫せる信仰、純理派の枯淡なる信仰にあきたらぬものゝためにはげに一陣の清風也、吾人は信念論の研究に於て二派の信念論が宗教としての純粹なる立場を自覺して之を現代の教壇に寄與したるを多とせざる可らず、

顧みて一般教壇の信仰状態を見れば彼等は殆んど人生の

意義を自覺せず、信仰其ものゝ價值を知らざるものゝ如し、特に吾日蓮門下の教壇に於ける信仰の状態は吾人殆んど何の言語を以て之を形容し得べきやを知らざる也、

雜亂勸請、迷信撲滅の聲は如何に盛んにして此が改正は如何に毎々繰返されたるやを知らず、而も此等の改正を遂行して、其信者の心靈に何等の反響を與へたるか、再言すれば雜亂勸請を改正し迷信と撲滅して其結果信者の心靈に與へたる信念の響は如何なるものなりしぞ、將亦宗義研究に突進して千條萬條系の乱れたる如き教理論の中間にさまようて其人は果して信念てふものを得たりしや、吾人は毎々宗義學者と稱するものゝ信念論をき、たりしが乾燥なる教相説の道程を辿りて煩瑣なる教理論の分域に進み結論としての信念の鼓吹に到りては殆ど命令威壓の態度なるが如し、斯の如くにして與へられたる信念は世の救を求むるものゝ心靈の飢を満されたるべくや吾人は斷じてその然らざるを信する也、吾人は聖祖門下の教壇に於ける信念の状態に於て其客体的方面に於ては亂雜を極めて完全なる本尊の認識成立せず、其主体的方面に於ては教相教義の網に縛ばられて毫も心靈の奥に潜める向の信念よびさまされず嗚呼是豈信念の墮落にあらずや、勿論教相教義の信念上に於ける位置は重要をなすものなれども若從來の教相論が信念の形式を構成するものと見たりしものは經典の高等批評に接したる場合は其人の信念は如何に動く

べきや、若從來の教義論が信念の内包を構成するものと見たりしものは教義の哲理的批評に接したる場合は其人の信念は如何に動くべきや、若此場合に於て彼等の信念にして動くものとすれば、吾人は信念論上に於ける教相教義の位置を看取せざる可らず、教相教義の論やもとより重大なる科目にして藏經を繙讀する上に於ては少くともアリヤドネーの絲條たるべしと雖も、さりとして宗教の純粹なる立場たる信念論の上に於てさまでの位置を占領すべきものにあらず、吾人は信念の意識を研究し來るに隨て、愈々此議を強ふせざるを得ず、

吾人の序論は餘りに長くのびたり「御書」時代の信念を研究せむと企てたる吾人は現代教壇の信念の聲に餘りに多く耳を傾けたり、吾人は内に顧み外に考へ、今や正に「御書」時代の信念を研究すべき場合となりたりき、吾人は「御書」時代の信念を現代の教壇に貢獻して以て聊か現代信念論の資料に供する事を得ば幸ひ也、

「御書」時代とは日蓮上人が其信者に御消息を送られたる時代也、是やがて吾日蓮門徒の原始信念の宿る處にして吾人の尤も敬虔の意を捧げて見る處也、顧ふに日蓮上人の信念論の特色は強き力と深き同情とが互ひに緯となり經となりて發露せられたるにあるか如し、特に女性に封しての御消息に於て尤も遺憾なく發露せられたるか如し、「單衣抄」の一節に「此帷を著て佛前に詣て法華經を讀み奉り候ひなば御經の文字は

六萬九千三百八十四字一々の文字は皆金色の佛衣は一つなれども六萬九千三百八十四佛に一々に著せ進せ給へる也されば此衣を給て候は夫妻二人ともに此佛尋坐して我檀那也と守らせ給らん今生には祈となり財となり御臨終の時月となり日となり道となり橋となり父となり母となり牛馬となり輿となり車となり蓮華となり山となり二人を靈山淨土へ迎へ取りまゐらせ給べし」といへるか如きは、施與の功德を稱讚して大いなる力を與へたるものにあらずや、而して此大いなる力はやがて上野夫婦が信念に宿りて全く信念の力となりたるにあらずや、日となり月となり道となり橋となる、如何に吾人の信念は強からずや、御書時代の信者が斯る御消息を手にしたるとき如何に心靈に強大なる力を得、而して永劫救済の宗教的靈感に打たれたるやを想ひ到れば、吾人は今にして尙神行き魂走るの思ひに堪へざる也、かゝる信念はげに永劫不滅の信念也、原始信念がかくの如き純粹なる信念を抱きたるにもかゝらず終に其面影を今に傳ふる事あたはざりしは誠に遺憾極みなきことといふべき也、 (不新)



時局に對する宗教家の運動

日露の時局破裂してより世の宗教家の多くが何等かを國家に貢献せんと焦慮しつゝありしは事實也、明治廿七八年の戰役に布教師として従軍し、若しくは國禱會の修行に惟れ日も足らざるの觀を呈せし彼等は、今再び其歴史を繰返さんとしつゝあり、吾人は宗教の立場が戰爭を容認するや否やを論ぜざるべし、何となれば宗教を奉ずる宗教家の總てが既に國家の一員として花やかなる軍國に參列するの一員なれば也、從軍布教、軍隊慰問、國禱修行は、國家に信仰の苗を植つけたる當然の結果なるべし、然り彼等宗教家の運動は斯の如き當然の結果を行ふ上に於て餘りに世の注意を引かざりしもの、如し、吾人は彼等が更に一步を進めて軍國時代に處する適切にして効果ある運動の開始せられむことを熱望してやまざりき。

果然、果然、日蓮門下の宗徒は五月十三日を以て神田錦輝館に於て有志大會を開き大日本宗教家大會は越へて十六日芝公園彌生館に開かれたりき、而して議する處のものは何ぞ

由思想の存在を肯定する能はざる也、今や日蓮門徒の如上の運動は露國信界の不幸を救ひ、以て正義の勝利、自由思想の尊重に了るべきを信じて疑はず、

然れども斯の如き條件が吾日本の外務大臣に於て果して遂行せしめ得るや否やは疑問也、戰爭の目的が全露西亞帝國の人權の發展暢達と期するにあれば如上の條件の如きを平和締結の主要なる議題となすことを得るはいふまでもなきことながら、今や日露の交戦は夫自體に於て東三省に於ける清國主權の保持と朝鮮に於ける日本の特殊利益の維持にあれば、これを主要なる條件とし之か附屬問題として露國の東侵政策の或點々は制限し若しくは撤去せしめ得べけむも、信界に屬する重大なる問題の如きに、手をつけ口を開かむは蓋し容易の事にあらずと信する也、若夫海陸兩軍が萬里長征して、肉薄吶喊、城下の盟約を爲さしむる程度までに進まば、戰勝國として日本の權利の衣は戰敗國たる露西亞の全土を掩ふに到らむ、斯の如くんば戰勝國のいふ處一も聞かれざるなく、政治に於ては專制の壓迫より立憲政治の自由に移り、宗教に於ては希臘教の舊式より信教自由の新形式に移らむ、是やがて城下の盟約の結果として當然収め得べき權利にして、世界の面目は此か爲に一新生らるべきは疑はず、吾人は今の戦局が何れの點まで進むべきを知らずと雖も、我小村外務大臣をして信教自由の宣言を確實に露帝をして誓はしむるか如きは、

即ち正義人道に基きたる公明正大なる思想を發表するにありたりき。

日蓮門徒の大會が議決したる露國に向て信教の自由を宣言せしむべく平和締結の際に於て日本の外務大臣をして條約の一に加へしむべしとの通告書を發するの議決は、時節柄尤も世人の注目をひきたるもの、如し、然り信教自由の聲は今や總ての文明國に於て眞理の聲として聞かれつゝあり、世界の公論人道の大義は之を容認して多大の贊同を表するは理の當さに然からしむる處也。

夫宗教の事たる人心内界の事に屬し、科學哲學の知識を尊重し深く人文發展の大局に眼を注ぎ、人權の自由を重んずる上に於て、必ずや信教自由あらざるべからず、今や日蓮門徒が此運動を開始したるは、宗教上の世界的問題として公にして且大なる運動也、然しなから昨明治卅六年の春と覺へしが露帝は既に信教自由を宣言したる事は也、されど吾人は此宣言が果して實際に行はれつゝあるや否やを疑ふもの也、侵略主義を以て政策となしつゝある露帝が萬國平和會議の張本人たる事を思ふて果然たる間に、キシネフ虐殺を敢て平然として遂行して而して信教自由を宣言しつゝあり、吾人は露國が斯の如き矛盾を屢遂行して而も平然として厚顔以て世界に臨むは殆んど解く能はざる疑問也、吾人は此意義に於て露帝が信教自由の宣言に向て多大の信頼を表し彼國信界に於て自

戦局を延長して全露西亞帝國の全滅を期して而して其結果にまたざる可らず、夫れ然り然らば則ち日蓮門徒が露帝をして信教自由を誓はしむる運動の如きは、單に外務大臣に其希望を開陳するにと、まればやむ、苟も其効果を収め有終の美果を呈する事を期せば必ずや戦局の一進一退に着眼せざる可らず吾人は當日指名せられたる委員諸氏の深き觀察と周到なる注意と敏捷なる手腕とに信頼して、且く其運動の経過を見む、

彌生館に開かれたる大日本宗教家大會は一種花やかなる會合なりき、神道の平田盛胤氏、柴田禮一氏の如きが演壇に登るを見たる吾人は、ユニタリアンの佐治實然氏佛敎の村上專精氏等が互ひに一場の雄辯を振ふを聞きたりき、司會者の久我候爵、座長の西有穆山氏、既に異彩にあらずや、そのみならず來賓の重なるもの、皆各宗第一流の高僧にあらざるはなし、吾人は斯の如き會合が、戰爭を動機として開かれたるを思へば、戰爭罪惡論者の吾人も一片の感謝を戰爭其ものに向て捧げざるべからず、何となれば異敎互ひに相搏ちつゝある宗教界が、斯の如き融和せる會合を開きたるは實に無前の事に屬すれば也、

彌生館に於ける大會の決議は人種の反感を解き、宗教の異同の爲の戰爭にあらずといひ、正義人道博愛平等を思想の爲の戰爭なりといひ、大會の決議を以て世界に向て之を宣言せるにありき。

想ふに日本宗教家の斯の如き態度は軍國時代に激せられたる反動として形造られたるなるべしと雖も、宗教夫自身か本來に具備せる人道的思想が偶々機會をかりて發展せられたるなるべし、教理問題、信仰問題の如きは各特殊の立場を有せる事として、互ひに反感を挑発しやすきも、其對世間的態度に到りてはや、共通の點あるが如し、此點に於て吾人は各宗教家が大會を催ふして同一の態度を以て同一の決議を公にしたるを感謝するもの也、此やがて敵國に對して宗教の公明なる性質を知らしめかねて日本に於ける宗教界の開進の程度を世界に向て發表し軍隊の勝利に伴ふて日本宗教の勢力を世界に扶植するの前提ともなり得べし、吾人は此意義に於て更に第二の新らたなる感謝を此大會に寄せるにためるふものにあらざる也、

珠數をつまぐりて祈りの聲を放ちつゝありし彼等は、世界に向て正義人道を大呼する彼等となりたりき、軍隊に隨伴して未來永劫の救済と説きつゝありし彼等は、光榮ある戦局の収拾に際して宗教思想の發展を企圖せる彼等となりたりき、是確に一進歩也、珠數をつまぐりて祈りの聲を放ちつゝありし彼等の間に、軍隊に隨伴して未來永劫の救済をどきつゝありし彼等の間に、何となく幼稚にして狹隘なる國民的宗教の面影がほの見へしかども、一轉して正義人道を世界に向て大呼するの彼等を見、光榮ある戦局の収拾に際して宗教思想

の發展を企圖せる彼等を見るに到つては、日本宗教の總てが如何に世界的普遍的性質を遺憾なく呈露したるかを見ざる可らず彼等の運動は今や國民的圈内より世界的圈内に入れり、是確に一進歩也、乞ふ進歩せる運動に依りて進歩せる効果と收めしめよ、(記者)

朝鮮傳道論

朝鮮經營の急務に附すべからざるは現在及び將來に通じての緊要にして且切實なる問題也、想ふに日露の時局が今日の形勢を呈せし所以のものは彼露國の東侵政策が一昂一低漸く韓國の獨立を危ふせんとし、而して其結果として日本の康寧と安全とに影響する所ありたれば也、されば開戦以來韓國の改革をいふもの姑息にして一時を補ふの愚劣なる政策は最早顧みられずして永遠なる基礎の上に安全にして且大膽なる改革を遂げしめざる可らずとは官民の一致して唱導する處也、在野志士の唱導する處は尤も簡單にして明快也、曰く韓國外交の權を全然日本に委任し且つ軍事の權も併せて之と日本をして採らしむべしと、是實に大膽にして明快なる韓國改革案也、更に帝國教育會は特に韓國教育會なる別部を設置し朝鮮八道を通して日本の高等小學程度の學事をしき、以て朝鮮をして改革の實を挙げしめんといふ、かくて教育に軍事に

外交に、朝鮮經營は尤も大膽に明快にして簡單に發表されつゝあり、吾人はかゝる外形的改革に伴ふて是非とも内形的改革を遂行せざる可らず、吾人は此意義に於て韓國の宗教傳道を唱導せざる可らざる也、

韓國の宗教傳道、其言や既に陳腐に屬せり、而も吾人は其事か陳腐なるだけそれだけ此韓國の宗教傳道てふ言葉に多くの真理を含有すると信する也、かつや從來韓國傳道の施設を爲すものも、將亦之を言ふものも、其計畫、其企圖、共に相携へて唯漫然たる虚形にして、一も實際に適用して其感化を全韓土に及ぼす事能はざる也、是豈千秋の恨事にあらずや、

今や露國の東侵政策に反抗して起れる日露の戦争は、我外交官、軍事官の手腕の下に、日本の權利は日一日に韓半島に轉達し、引て東三省に於ける利益の均等をうけ、進んでシベリヤの野に日章旗の翻るを見るも近きにあるもの、如し、此時に當て我戰勝國の宗教を韓半島に扶植し韓國の人民として我宗教の力の下に日本化し以て精神的保護國たる實をあぐるは實際を標準としたる緊要且切實の問題也、八道の人民は久しく宗教に飢へつゝあり而して其種今や彼等は宗教に離れんとせざるにあらずや、枯淡なる禪一流の宗教にあらずんば煩瑣なる戒律宗のみに支配せられつゝ、ある彼等の心靈界は如何に悲惨ならずや、韓國傳道は最早理論としていふの時代は過ぎ去りたり、即ち事實として行はざる可らず、然り事實とし

て斷して行はざる可らざる問題也、

然らば則ち之を如何にしてなしとげ得べきかてふ問題は也、吾人は此に關して一の成案あり曰く日本に於ける各宗寺院の或部分を韓國に移轉する事是也、假りに一宗より十箇寺を移轉すとすれば、之と十宗にすれば百箇寺也、之を廿宗にすれば二百箇寺也、二百箇寺、其數や尠しと雖も、其位置と財産とに於て相當なる寺院を撰擇して之を韓八道に平均に分配して以て宗教傳道の基礎を固むる事を得ば韓八道の傳道は優に見るべきものあらん、想ふに韓國傳道とて財政の途其當を得ざれば到底不可能の事に屬し、一旦花やかなる布教は開始せらるべくも永久に亘りて其傳道を繼續すべくもあらず、無資力なる僧侶を抱ける宗門の行政吏が如何に苦心したりとて海外布教費として十萬圓の豫算を其宗會に提出して之が通過と計るは到底出來ざる事にあらずや、斯の如き状態に沈みつゝある宗教財政は自ら徑路を異にして打て出でざる可らず、吾人は此意義に於て日本寺院韓國移轉論を唱導し、即ち時局の必要に促されたる切實なる問題として各宗當局者の注意を呼び、韓國傳道の基礎を固むる第一歩として是非とも寺院移轉論の行はれん事を望む、

更に第二策は朝鮮傳道株式會社の設立是也、更に第三策は政府の傳道保護金下附是也、此二つのものも各宗管長の名を以て運動したらむには其効果を收むるは易々たるべし、唯

恐るゝ處は日露の戦局が收拾されたる後に於て、戦後經營の名の下に諸種の事業が勃興し來る勢ひとして、此等の問題は閑問題として遺却されん事は也。よし遺却の不幸を見ずとするも戦後財源の回收にいそがしく爲に物質的利益を收むる事業に眼を鋭くして、資を投して利益の回收を百年にまつ傳道に於て世の宗教家が政府と離れ社會と離れ獨立して尙且韓國傳道の事に従はんとすれば寺院移轉論の安全にして且なしとげ得らるべきことを信じ、此を進むるに多大の力を以てするもの也。

砲火の戦ひに成功したる日本は、他の總てに於て成功せざる可らず、韓八道の宗教的經營は今や識者の間に唱導されつゝあり、吾人は東洋永遠の平和を保持する政策の上に於て韓八道の宗教傳道の日も速に大膽なる方針を以て開始されし事を望む、(記者)



一期と不斷と同一住位の臨終

法話

思連記

(承前)

故本昌院日達上人著作

次に一期と不斷と同住一位臨終成佛と云ふ事あり此心を知ることを肝要なり 是を申すに就て人々疑ひ思ふべし うれを如何にと申すに まづ臨終の一念は大事なり 惡念起り正念を妨ぐるると云ふことはりなり 其惡念起り正念を妨ぐる事なれば病人の私ならぬ事もあり まづは斷末魔の苦來りて正念を妨げ申さんも病人の詮方なき事なり 又魔王のたぶらかさんも是非なき事共なり 勿論妻子眷屬臨終に近付べからずともいひがたし 又法華宗杯のよき同行もあらばこそ臨終に近付てよき法を勧めさすべけれ うれも無さにはいかせん 勿論出家沙門もあるならば呼び招きて 鐘を打ち勘文を唱へ貫ひて臨終正念を頼むべき事なれどもうれも其處になくばいかせん 其上奥深く住居する女の身などは其處に寺をも持ち頼む師匠のありとも左様に五日三日前より出家を招き師匠に近づき臨終

を頼む事もなりがたし 况や武士などの戦場に趣きて高名して死ぬべき時は題目唱へ申す心さへ起るまじまして人のすゝめ思ひもよらず惡縁計りにて死し申さんなれば 臨終の時を期として正念を樂しみ 佛にならんと思ふ望み絶へたる様に思ふ人もあるべきなり 是れ尤の不審なり 是を以て唯今の一期と不斷と一位成佛と云ふ事を知れば 右の疑も霽れて臨終成佛うたがひなきなり さて一期と不斷と申すは上に申す如く斷末魔六十四轉の苦にあふて死ぬる處の大臨終を一期の臨終とも利那の臨終とも申すなり 又不斷の臨終とは朝な夕な行住坐臥晝夜十二時少しも忘れずして臨終の心もちあるを不斷の臨終とも多念の臨終とも申すなり さて一期利那の臨終は其朝いろくの障害ありて正縁も起り難き事 智者上人といへども五日三日前に前後を亡じて正念みだるゝ事あり まして俗男俗女の身の上をや もし斯様に一期の臨終あしくば佛にはなるまじき故に 不斷多念の臨終と云ふことを佛菩薩大師先德の立おきたまふ 不斷多念の臨終が彼一期利那の臨終と同じ位にて 必ず成佛するぞと云ふ事を一位成佛とは申すなり されば不斷多念の臨終の事は始にも申し候得共 委しく此心を申すべし 不斷多念の臨終とは 一期の終り一期利那の間に息をひき切

り臨終する計りにあらず 朝夕不斷念慮のうつり替るも臨終なり 誠に一期の終りにも一念利那の心中にも臨終はあるものなり 常々も人の命と云ふものは唯入る息出る息のかよひなり 此息の間に臨終はあるなれば 一期と不斷と一位成佛とは申すなり 人は生れてより出入の息のはり合ひにて命を持てるなり されば生れてわつとなくば生の始めなり さて死する時うゝとひく息は死の終なり 然れば常々の不斷の出入の息は生死の間なり さる程に常恒に臨終はあるものなりと心得て 一念一念に只今こゝ臨終なれと合點して教示の如く臨終正念是好良藥の南無妙法蓮華經と唱へ給ふを 不斷多念の臨終とは申すなり

本尊に向ひ奉りし時の一念

木村義明

吾等の妄想 凡う人間程妄想の多いものはありません、若し此人間に妄想が無ひならば、その位此世の中は靜かに治て行くでありませうか、私共はどの位安樂に暮せるでしようか、實に此世の中は寂光淨土と成るでありませう、然しなから、私共は御互に、此妄想を打捨てることが出来ません、私共は、煩惱の塊りで出來て居る身軀であるから、どうしても打捨てること

が出来ません。あせればあせる程です。妄想が起て来ます。試みに諸君は、御自身の心の作用に就て、毎日毎夜、時々刻々、どの位妄想を起すかを調べて御覧なさい。夫こそ實に驚きます。強慾、憎悪、怨嗟、嫉妬、懷恨、憤怒、厭嫌、身惱、煩悶、夫程でなくとも、世間への体裁をモット飾りたいとか、立派に見られたいとか、夫は一種々雑多の考へを起して、身分以上の目論見をし、贅澤を仕たがるのは、確かに此は私共の心に於て、日々起る處の妄想であります。併し此妄想は人間一般普通の事で仕方がない、人間に此妄想則ち心に欲と云ふものがなければ、社會は發達進歩しないのであります。仕方がありません。併し此欲、妄想も宜ひ加減に節約しないといふ、實に困るのであります。社會の出来事は重に此妄想に基因で起るではありませんか、日露の戦争も、露西亞人の妄想から起たのであります。

此妄想を節約せずして其放逸に委せると、遂に他人の妄想と衝突して、利害の關係、權利の爭奪と云様に成て、茲に悶着が起り、煩悶、忿怒、憎悪、嫉妬と成て、社會の動亂が絶へないで、悲惨の境遇に沈淪するのであります。新聞の三面に忘ましくしき記事の絶へないのは、其故ではありますせんか。人間は自ら地獄の種因を播きつゝ、煩悶苦痛に陥り、一日も平和の日なく、一時も安樂の日なく一生子子の如くにして終るのであります。斯様に考へ来ると人間は御互に愚痴な者ではありますせんか。

念であります。夫と同時に起るのは佛様は我々を救ふて下さると云ふ所より、「感謝」の念が涌ひて来ます。夫から何となく慕はしく成て「渴仰」の心が起り、至つて心が「柔和」に成て「懺悔」の心が起ります。則ち自分が今迄爲したる罪惡過失を自覺して、悔ひ改める心が起り罪障消滅を願ふのであります。御經に「威く皆懺悔を懐ひて渴仰の心を生じ、衆生既に信伏し質直にして意柔軟に、一心に佛を見奉らんと欲して自ら身命を惜まざる」と云てありますのは、能く我々の心の状態を説き現したものであります。

扱て此心の状態はホンの僅かの時間であり、此「一念」が、我々人間に取ては最も大切な、最も貴き「一念」であります。此「一念」が起る時は平生の種々の妄想は悉く打消され、色々の煩惱は悉く洗ひ去られて、全く清き「一念」に成ります。佛様の威應、利益、因果の功徳を讀り與へ給ふと云ふのは正しく是時でありませう、御經には「身と意と泰然として、快く安穩を得る」と示してあります。是時我々は蘇生するのであります。是時我々は生命を得るのであります。私は是時は處に於て、始めて宗教の有難味を感じます。あ、本尊に向ひ奉りし時の「一念」は少しの妄想なく、煩惱なく罪惡がありません。あ、是清淨なる「一念」、崇敬、感謝、渴仰、平和、靜肅、安樂、希望、歡喜、あらゆる靈の光を以て満たされて居ります。是が菩提心であります。菩薩心であります。佛性であります。是時我々の信仰の「一念」と佛の大

活て居る甲斐がない位に思ひます。併し生て居る甲斐がないからと云ふて、矢鱈に死んでしまふのも人生の道でありませぬから、何とかして安樂に暮らせる様な適當な方法を見出さねばなりません。

私は茲に一の活路と見出したのであります。私は宗教の信仰に依て、私の信する貴き光明に接することに依て、私の煩悶苦痛は一時に消滅するのであります。私の妄想を幾分か減却することが出来るのであります。私計りでなく、宗教を信する御方は誰人も同じことであらふと思ひます。夫は私が朝夕勤口の際一本尊に向ひ奉りし時の「一念」、則ち御佛前へ坐つた時の時間の「一念心持」であります。此時程好い「心持」はありませぬ、何だか嬉し様な、自分の希望が達しられるかの如き「心持」が致しまして、一種崇高敬虔の情に堪へませぬ。恰ど二三才の小兒が戸外の遊びより家に歸りて、母の懷に乳房にすがつた時の「心持」の如く、學生が學校の講堂に於て、自分の尊敬する教師の前に立ちし時の情の如く、忠君愛國の臣民が皇帝の前へ召出されし時の感の如く、唯だ何とも謂へない念が起ります。人間が如何に立派な心を持つことがありまして、之時程清き、涼き、平かな心を持つ時はありますまい、私は此時の「心持」を

と謂ひたいのであります。諸君よ、佛前へ坐つた時の心の状態を能く考へて御覧なさい。先づ第一に起るのは敬虔崇拜の

慈大悲と一致結合するのであります。我々の心と佛様の心と相通ふのであります。是時の我々の住處は寂光淨土となり、靈鷲山は是時我々の前へ築かれます。久遠實成の大本佛は是時我々の前へ現れます。淳々たる御說法は是時我々の耳へ聞へます。微妙の音楽は是時我々の心琴に響きます。諸天神は是時我々を守護して下さります。諸君驚き給ふな、是時我々は成佛して居るので、諸君如何です。諸君は嘘と思ひますか、是は決して嘘詐りではありますせん。確かに私の實際であります。口の先き軍の先計りではありますせん。私と信仰を同ふする熱心なる御方は、確かに事實が有ふと思ひます。是瞬間の「一念」は我々人間に取て、實に貴き清き「一念」であります。

併しながら諸君、悲ひことには我々は未だ、是貴き清き「一念」を念へ持續することが出来なくて、急ち素の奎阿彌凡夫に歸るのであります。宗教信者の最も能く注意を要し、反省を要し、熱心を要するのであります。是清淨なる、「一念」の持續が一番六ヶ敷のであります。信仰に依て是「一念」を起すことは比較的容易のであります。是「一念」を持續して、佛様の前計でなく佛前を退きたる時も、業務に就く時も、人と談話をする時も、妻子眷屬に對する時も、親戚朋友に對する時も、社會一般に對する凡ての時に於て、是「一念」を持續することを得たならば、夫こそ立派な人格を得ることであるふと

思ひますが、併し是は仲々出来ないものであります、せめて一日の中に二度か三度位でも宜ひから、是清浄なる「一念」を喚起することが出来たならば、實に立派な精神修養人格修養になると思ひます、是清浄なる「一念」を度々喚起することが、人生に取て最も必要なる條件でありまして、宗教の信仰を熱心に奨励するのは、全く是爲めであります、則ち人間を完全に仕上げ、人生の目的を究極迄達せしめるに就ては、是清浄なる「一念」は重き任務と、強き力を有して居ります、更に言換れば是「一念」は、凡ての道德的向上的の、あらゆる人格上の善美なる意味を帯びて、人生の上に運用開展せしむる大原動力であります、靈化の源泉であります

不朽の生命

であります、我々は一旦不朽の生命を得たならば、容易に失ふものではありませぬ、故に之記憶を深くして、時々刻々、「一念」の聯想を喚起することに勉めなければなりません、是「一念」の相續は、塵積で山となり、滴水集つて海となるが如く、多年の行業は漸く累積して、臨終の際の一大靈感に依り、頓に靈山に往詣し、即身成佛の素懷を遂ぐるのであります、佛様は「是人佛道に於て、決定して疑ひあるとなし、自然に仰せられ、日蓮聖人は「法華の行者は疑ふ心なくば、自然に佛界に到るべし」と宣ひ、或は「南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と唱へて、唱へ死に死するならば、釋迦多寶の諸佛、靈山會上にて御契約なれば、須臾の間に飛來て、手をとる肩

に引懸け、靈山へはしり給は、二聖二十羅刹女は、受持の者を擁護し、諸天善神は蓋を指し幡を上げて、我等を守護して、備かに寂光の寶刹へ送り給ふべき也、あらわれしや」と謂れられたのは、正しく我々が感得したる清浄の「一念」が功德を成滿して、久遠の本佛に融合する其間の消息を打漏したのではありますまいか、あ、我々法華經の行者は朝な夕なに於て、本尊の御前に於て起す處の是貴き「一念」は實に天にも地にも代へ難いのであります、諸君よ、御互に是「一念」の護持聯想を勵みて、芽出度成佛の臺に達しようではありませんか、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。(終)

実傳

日蓮大聖人 (第十五回)

佛城 關田 養 叔 講演

久しかりて比叡山に歸つたる蓮長師は、相替らず横川の定光院を我が住居と定め、佛法の研究に餘念も御座いませぬが、宗風亂れたる山内の學問僧らが、天台嫡流の源を忘れてしまふて、文字の穿索や理屈の製造に走り、ヤレ檀那流だの慧心流だの亦是安然流、安海流などと、下手な插花の先生が寄り會つた様に、互に流儀の自慢をして誇ふて居るけれど

も、畢竟いふと小人島の長比で何れが高いも低いも有つたものではない、五十歩を以て百歩を笑ふ様な話であるから斯様な狭い量見では、大海の如き佛法の真味を味ふことは出来なみに依つて、何流々々などといふ詰らぬ諍ひをば一切構はず餘所に見て、明け暮れ天台大師傳教大師の正脈を尋ねて自分の智解を堅め、猶は諸宗の教義を尋ねては佛敎の起盡を明に悟り、一切經を讀むことも既に三度に及んだ、

月日に關守なく、時に建長四年寅の冬と相成り蓮長師御歳三十一才、叡山に参りましてより前後十二年の歳月を送り、茲に多年の間、我が胸の中に歸まつて居たる佛法の上の疑團も晴れ、日本に弘まつて居る所の佛法の是非曲直も判明いたし、釋迦牟尼佛の御本懷も明かに解り、亦末法の當今には如何なる經文と如何なる修行が時世に適ふものであるかといふ事も知り、佛世尊の御弟子たる我は如何なる決心を以て世に起つべき乎と云ふことも、胸の裡に確と定まつた、この上は「我れ是れより故郷安房國に歸り、不肖なれども此身をば萬年救護の大法に獻げ奉りて、御國の爲にも盡し一切衆生をも救ひ佛恩をも報じ奉らん」と、口には言はないけれど非常の大決心を胸の中に包み、歸國の準備を整ひ、傳教大師の御廟に報恩の香華を供へ御經を讀誦して御暇申し上げ、多年の間三塔の學寮に骨肉の交りを結んだる學問修行の友達には残りなく暇を告ぐれば、尊海の如きは殊に親しき間柄であるから取り別け名残と惜んで、饒別の品物などを差し出し、夫れの

みならず馬を以て京都まで送る様な譯であつた、蓮長師は京都へ出て、天王寺屋浄本が家を尋ねて、此の度叡山の遊學を卒へて我故郷房州へ歸るといふことを告げたところが、夫婦は非常に別れを惜み「何卒本年の冬だけは拙者宅にて年を送り下さる様」と頻りに押し止めるものであるから、この冬をば浄本が宅に送り、翌年の春こゝを出立いたし伊勢の大廟に參詣を致さんものと路を伊勢の國に取り、先づ同國渡會郡五十鈴川の邊なる間の山浄明寺といふを尋ねました、此の寺は天台宗であつて當時の住僧は比叡山にての知己であつたから、此處に宿を取り暫時逗留をして居ります内我日の本の天祖たる天照大神を祭り奉りたる大廟に毎日參詣と致し、恭しく法樂の御經を捧げ、これより一切衆生を救ふべき大願を言上し、謹みて我が前途の御守護を祈り奉つた、山を越え川を渡り多くの日敷と重ね道中無事に房州小湊の清浄寺に歸りました、十餘年ふりにて遭つたる御師匠道善密師は、大に喜び手の舞ひ足の踏む所を知らずと云ふ有様に、嗜れし涙をこぼし手を振りつ、「年月永き學問修行に能うも達者で身體の疲勞もなかりしよ、見れば汝は、幼きころよりも面貌風采さへ氣高くなり、凛々しき人となりしよな我れは取る年ごとに身體も弱り行くばかり、これからは此の山に止りて老の身の末をも見てくれよ」と言ふた、蓮長師は「唯々」と謹みて答ふるばかりであつた、嗚呼この老和尚……今や一天下に鳴り渡らんとする蓮長師の心を知るや知

らずや……唯々と和らかに答へたる蓮長師の胸の内は如何に心苦しかつたであらふか……

同寮の圓密、淨顯、義淨等の兄弟弟子を初めとして山内にある小僧たちに至るまで、更るがはる無事の歸國を喜んで、また使を馳せて重忠夫婦に蓮長師が無事歸山の喜びを告げてやれば父重忠は使の者と共に急ぎ山に登りて、御師匠道善坊に對し多年の間の淺からぬ恩義と御禮申上げ、左右する中に無事の歸郷を祝ふ響應は出る、山内一同も充分のもてなしに其の喜びは語に盡されね程であつた、やがて日も傾きます故、重忠は厚きもてなしを謝し、明日は我家に來るやうにと蓮長師に告げつゝ立ち歸りました。

翌日蓮長師は、山を下りて小湊に至り、父母の機嫌を窺ひますれば、父重忠は、我子の出世を喜ぶ心面に現はれ、且つ言へるやう『昨日道善御坊に面會いたしたところが、御師匠様の申すには、此山に所化の僧も澤山あつて我弟子の多い中にも、我が頼みとすべきは蓮長ばかりである、我は年もいたく取りて老へたる故、程なく此の山を譲りて後住を嗣がせんと思ふなり、さすれば我れも安堵し御身達も幸福よきことでは御座らぬかと懇ろに申された、たゞ御師匠も兩親も心配になるは、學問好なる汝が、又もや、今までの長き年月の旅修行の心動いて、鎌倉へでも往きはせぬか京へでも上りはせぬかと思はれて、それが心にかゝるばかり、この上は永く足を止めて、諸人も仰ぐ清澄の住持と爲り給はれよ』と、一向に

我子を思ふ親の心から、斯くも真心こめて言ふは此の上も無き有り難きことながら、今や蓮長師の胸の中には、世を憤り國を憂ひ佛法の亂れたるを歎き身を以て法華一乘の旗を翻へし、普く天下諸宗の邪義を打ち破つて佛法の正脈を傳へ、末法萬年の闇夜を照さんとの、大勇猛心は、物々として燃えて居るのである、僅か片田舎の一箇寺位に満足をして居るやうな小さな量見では無い、さりながら心の奥を知らぬ親人が心こめての慈悲深き言葉を聞く蓮長師の心苦しきは、眞に身を切らるゝ思ひがあるのである。

胸の中に思ふて居る事を有りの儘に言ふてしまへば、さぞ父母も吃驚あらばすであらふ、御機嫌も悪からふ……言ふて了ふか……言はずに置くべきか……』と暫時思案に沈んで居りましたが、既に思ひ立つたる鐵石心、今さら止むべき事でも御座いませぬから、一たびは言はねばならぬ事と決心致し思ひ切つて『父上様の御許、一々に肝に染みるばかり有り難き事には存じますれど、蓮長、幼き頃より佛弟子となり、種々心と砕いて佛道を修行いたし、一切經も幾度か拜み奉り佛世尊の御本懐も胸に存び、つらく八宗九宗のありさまを見るに、一つとして眞誠の教義とては無く、源を忘れて末に走り、邪に迷ふて正しさを捨て、堂塔伽藍は日本國中到處に光り輝けど、佛陀の御魂魄は在まらず僧侶は幾十萬といふ程あれど眞の僧は一人もなく、眞實の佛法の光りは滅して世の中は暗黒も同然、斯の状態にて移りゆかば、王法佛法

の行末は如何になりゆくらんと、思へば思ふほど兩眼に涙は抑へがたく……抑も佛法廣けれど眞實の教へは、法華經に限る、諸餘の經文は、皆この法華經に導き入れん爲めの權教方便……未法今時の世に佛の遺し給ひたる一切衆生を救ふべき大良薬は、此の妙法蓮華經である……斯く申すことは一々みな佛の經文に記し給へし金言にして蓮長が私の言語には候はず……思へば引法や法然や達磨などの諸宗の祖師たちが、權教方便の經々を取りなして一切衆生を迷はしたるこそ佛法の怨敵なれ……』と思はず悲憤の涙を呑み、猶ほも語を續け

『……蓮長これより經文に任せて佛世尊の所屬を譲り、たとひ八宗九宗のものどもに如何に怨み感するゝとも、此の轉軀のあらん限り恩の根の續かん限り、妙法蓮華經を一天下に弘め、佛陀の御本懐を世にあらはし、國を救ひ一切衆生を助けんと思ふのである、これ蓮長が兼て決定致した大願、何卒父上母上に於ても蓮長が胸の内を酌み取り遊ばして……』と覺ぬすはろりと落つる涙を衣の袖に拭ひつゝ、語靜かに答ふれば、母の梅菊は、驚きて衣の袖にとりすがり『御身が説き聞かす所は、誠に用にしみて尊けれど、さりとて道善御坊様の有り難き思召しもあるものを……慈父の語言と彼れ此れ思ひ合せて、心を餘處に移し給ふな、我等が安心のみならで御師匠様までが……』と兎や角う言はるゝを、蓮長師は恭しく兩手を支へ『元より吾れを出家となし給ひしは、衣食を貪ばり高き位を求め、榮耀榮華に一生を送らせんどの思召しに

は候はで、御兩親様を始めとし世の人々の二世の安樂を祈らん爲めである、されば御兩親の膝下を離れて二十一年の間、いろ／＼と難儀苦勞せしも、皆法の爲め世の爲めにせし學問修行、今や其の功積み、心を決定いたしたるを、却つて之を悲み給ふは……慈悲恩愛も深き御心からとは言ひながら……斯く蓮長が押し切つて申すは、御兩親の仰せに背くに似て、却て誠の道を以て御救ひ申し上げるもの、必ずや十方の諸佛も納受ましますらん……』と熱心に説き諭せば、默然とし傍に聴き居たる父の次郎重忠は、心解け顔に喜びの色さへ顯はして『三千界の人々を救はんどの、世にも稀れなる有り難き大慈大悲の鐵石心をば、淺薄なる凡夫の愛着の心を以て妨ぐるは、誠に罪深し』と却て妻をも諭せば、妻の梅菊も心どけて、父母もろどもに我子ながら其の尊き大願に感入り、『いども尊き御坊の御誓願、却々もつて我等如き凡夫の測り知るところでない、これよりは御身が思ひ定めし大法の道に、心措きなく盡されよ、我等も又世の人々どもにも救はれん……』と言ひ出づれば、蓮長師は兩親を伏し拜み『父母様の斯る尊き御語ばを聞かします此の蓮長が喜びは、大梵天王と爲つて三千大千世界の寶珠を我身に得たるよりも喜べしう存じます、誠に此の御詞こそ、一天四海に妙法の廣宣流布すべき初めであると、ひたすら喜びまして、是れより蓮長師は清澄に歸りまして御座います、然し清澄に居りまして、時々佛敎の教理如何を問ひ尋ね

るものがあつても詳しくは述べないで、成るべく比叡の山の景色が好つたとか、高野山は閑寂であつたとか、多く話しを外所に轉じて、獨り黙然として英氣を養つて居つた。鶴は高く九天に鳴かんと欲して先づ靜かに其の双翼を整へる、天をも振ひ地をも動かすべき大活劇は將に起らんとするのである、謂ゆる日蓮大聖人の傳記中の花は是れより開らさ初めんとするのである。

正誤 前號の本欄記事中に
『我國は宋朝時代に筆蹟を傳へて』とあるは
『我國に、宋朝時代の筆蹟を傳へて』の誤植

詞藻

新曲 日蓮記鶴岡卷

作者 古定 不新

所作舞臺長唄出陣子連中居並ぶ
稱吟「星月夜をささる御代の鎌倉山、峯の松風靜かにて 絲竹の音にや通ふらん
「されば北條時頼は 世を握る手のなかなかに、それとはこゝにあまらねど、指を佛法に墨染の衣の袖は短くも、をささる御代の長かれど、祈る心の鶴が岡八幡宮へとつきにけり

平左衛門時頼のふのふ我君、いうき候ふ程に、此處ははや鶴が岡にて候ふ、

大學三郎「御參拜あるよしかねて聞へしかば 我君御祈願の寺々より、御經奉納のみ使見ゆるげにて候ふ、

宿屋左衛門光則「我君執權の始より、深く政道に心を傾け善政日に夜に榮ゆるに、まして此頃佛法の御修行いとも尊くをばへ候ふ、

進士太郎「我君佛法修行の御志は、御政道の御資と存じ候ふ北條時頼 吾今日の參拜を聞き祈願こめたる寺々より、御經供養あると申すか、さらばこれにて其御使を御迎へ候へ、

四人「かしてまつて候ふ、

進士太郎「あれあれ一の鳥居のわたりに、紅染の裝束したる女藪の、羊車鹿車をひきたるは たしかにそれと見うけ候へ、

「ひくや車のくるくると、羊車鹿車のみ使は、鎌倉御所にかくれなき色香あらそふ花乙女、天女下りし思ひにて、まだひもどかね御經の功德の程ぞたうとけれ、

六浦「妾は二階堂信濃前司の娘六浦と申すものにて候ふ、これは楊樂寺良觀上人より奉らる、御經を羊車にのせて參つて候ふ、

八重櫻「妾は筑後左衛門の娘八重櫻と申すものにて候ふ、これは建長寺道隆禪師より奉らる、御經を鹿車にのせて參つて候ふ、

江島「妾は青砥左衛門の娘江島と申すものにて候ふ、これは光

白妙「のふのふ我君其御經の供養しはし御まぢ候へ、

時頼「何ぞ御尋ね候へ、

光則「うれなる乙女は何者にて候ふや、はやばや御名乗り候へ

白妙「妾は中務三郎左衛門尉の妹白妙と申すものにて候ふ、さても今日鶴が岡八幡宮へ御經供養を行はせらる、事世上に聞へ候ふ程に、名越松葉か谷にをはしす日蓮上人より、法華經一部奉らんと、白妙御使として大白牛車に打乗て參つて候ふ、

時頼「それは近頃奇特とこそ存じつれ、一代經の肝要とさく法華經の意を、とくとく御語り候へ、

白妙「あらわりのたやかたはげなや、さらばこれにて語り申さん、

「月は夜光の王にして、法華は佛法の魂ひとかや、鷲の山久遠劫來はれて、真如の月の澄み渡り、華嚴櫻の暁夜に十玄六相の影ゆかしく、いさ、流る、阿舎の川にうつりては四蹄十二の影すいし、方等の秋のみ空より般若の冬の茅原に、うつりて、すみて、影いくつ、三つ四つ二つやとせせも、妾は一つ鷲の山すみてもらぬ法華經の真如の月と仰がぬものはなかりけり、

時頼「かゝるたうとき御經としらすして、今まで信せざりつるころ本意なき事にて候ひつれ、

白妙「其のへにころ妾これまで參りつるにて候ふ、此上は寺々より供養の御經は御とゞめられ候へ、

明寺良忠上人より奉らる、御經を牛車にのせて參つて候ふ
時頼「いかに左衛門尉、これなる乙女達に御經のいみじさを語り申し候へ、
「かしてまつて候ふ、いかに乙女達、供養せられ候ふ御經のいみじさを御語り候へとの御誼にて候ふ、とくとくこれにて御語り候へ、
「かしてまつて候ふ、
「夫世尊の教へかすかすの花より多き其中に、始て開く梅の花、華嚴の晨匂ひ濃き、濃きやうすさや戀衣、ふく春風にほころびて、をみひのだけを友仙のふりの袂のゆたかさも、色即是空の阿舎會に、ちぎれちぎれて恥かしや、それよ淨土のいみじさは三部の經にをさめたり、西へ入るさの日の影に紫雲たなびくめでたさを、人こゝ知らね吾獨りしるやうれとも岩間も、眞清水清き行ひの、二百五百の戒行に、身の垢いつかきへはて、聖のはまれたうとしや、國安泰の祈念には般若經をよ仰せつ、不立文字の文字なきも、御代に筆あれ智者あれと祈り祈られ、鶴が岡尾上の松の翠りこく變らぬ色や我君の、御代の榮としられけれ
時頼「つれ劣らぬ經陀羅尼、いそぎ光則、神の御前へ供養せられ候へ、
光則「かしてまつて候ふ、
「妾模様も白柏子、神をいさめの七五三ゆふて、大白牛車をひきつれたる、乙女ぞ一人いろさ來る

「かしてまつて候ふ、

時頃「げに尤もに候ふ、さあならば光則法華經ばかりを供養せられ候へ、

江島「あらいぶかしや我君の、
八重櫻「日頃の祈願してさせ給ひ、
六浦「一向法華を信仰あるは、
江島「良忠上人をはじめとして、
八重櫻「道隆禪師の御思召、
六浦「良観上人のみ氣色も、
三人「はかりがたなう存じ候ふ、
白妙「これぞまさしく三類の悪口罵詈雑言と存じ候ふ、
時頃「かくあらんとはかねて知る、いろが法華經を神の御前へ供養せられ候へ、
光則「かしこまつて候ふ、

唄「大白牛車に打乗せたる紺紙金泥の法華經を、神の御前へ供養ある、時頼公の法供養、神慮にかなひ給ひけむ、その時妙へなる音楽さこへ、ゆめかうつゝかまぼろしか、其處ともなしに顯れし神の姿をたうとけれ、

八幡大菩薩「いかに時頼、いしくも法味を捧げたり、吾靈山にありし時、末法萬年の世にいで、法華弘通の行者を守らんと習ひしが、今の日蓮上人こそ正しく法華弘通の導師なり、汝が今日法華供養の功德に答へ汝を三類の強敵となし法華に敵する人となさん、三類なければ法華なく、法華なければ三類なし、汝つとめて三類の強敵となれ、其逆勝の功德により汝

か子孫の代に到り、鎌倉の武威を以て他國侵迫の難を打平げん、ゆめゆめこれと疑ふなかれ、
唄「夢かうつゝかほとゝぎす、聲は雲井にさへさりて、異香ぞ獨り薫じたる、
時頃「さては神も納受まじませしか、法華の功德廣大無邊あらめでたやな、白妙、一さし御舞候へ、
白妙「かしこまつて候ふ、

唄「鶴が岡齡久しき御代なれや千歳の鶴も遊ぶなり、由井が濱砂數ある御代なれや萬年の龜も浮ぶなり、御代の榮への長かれと神も佛も守護ある、鎌倉の代は萬々歳、めでたくこゝに舞ひ納む
注「日 羊車鹿車牛車大白牛車の名は法華經の譬喩品に出でたり

次號豫告
脚本 龍口夜半嵐

古定 不 新作



紹介

本誌より掲載せる文學士辻善之助氏の講演に係る慶長宗論は學士が文科大學史學會に於て講演せられたるものにして識見該博、論點明確、特に日蓮門下の一讀すべきもの依て同學士の承諾を得て史學雜誌より轉載す

慶長十三年淨土日蓮宗論について『史學雜誌』

序論本朝四箇度の宗論附大原問答偽作説

本題に入るに先だつて、少しく古來の宗論全般に亘つてのべておきまじやう、宗論といふものは昔から屢々あつたものでありまして、一應和の宗論、二文治の宗論、三天正の安土宗論、四慶長の江戸宗論、がありまして、この四つをわけてその事をするし、「本朝四度宗論記」といふ一冊が出来て居ります、第一の應和の宗論といふは、村上天皇の、應和三年八月清涼殿に在りて、南都北嶺の僧共十人を召して、五箇日間法華を講せしめられて、天台の良源即慈慧大師、僧兵を起した人として有名なる者、此良源と、奈良の法相の仲算と、對論せしめられた、二の文治の宗論といふは、即ちまた有名なる法然の大原問答の事でありまして、文治二年天台の顯真、後に座主になりたる人、から法然に會見を求めて生死出離の要を問ひ、其秋にいたりて諸宗の碩學を大原勝林院に會し、上人と法義を闘はしました、その結果として顯真は一向稱名の道場を院内に建て、不斷念佛を行し、其他の大徳法然に歸依するもの甚だ多く、他力往生の教ひろく傳播するやうになるのであります、その中には高野の明遍、または笠置の貞慶等高徳を以て鳴り、博學を以て聞へたる人もあります、之を世に大原問答、また大原談義と申しまして、それ丈の一冊か、世に行はれて居ります、でこれにつきましては異説がありまして、「大原問答」は傳通院の開山なる聖岡(了譽)の偽作したものであるといふ説があります、それは私

の見ましたのは、明治卅四年五月十五日發行の、「佛教」第七十一號に、大内青巒居士が、麻溪茶話といふ中に書かれてありますのを初めといひます、その説によりまして、ある淨土宗の大徳の話に世に、名高き「大原問答」は聖岡の偽作したものである、聖岡は常に性頓相頓の説とのべられたがその説の據とする爲めに、この「大原問答」を作り、また「大原問答」の據とする爲めに、「麒麟聖財論」といふを作られたといふ、これ丈の事がかいてあります、聖岡といふ人は曆應四年に生れ、應永廿七年に歳八十を以て寂した人、關東に淨土教を弘めるに大功のあつた人でありまして、今の傳通院はこの人を開山と致して居ります、この「大原問答」の偽作であるか否かといふは、尙大に研究を積まねばわからぬ事でありまして、とにかくこれ丈の事件が、當時の記録類に見へぬといふ事は注意すべき事でありまして、しかしながらこの問答は、随分古くから行はれたと見へて内閣文庫に、永正十七年の判本といふのがあります、永正十七年といへば聖岡の寂後丁度百年目に當ります、また「拾遺古徳傳」にも記載してあります、古徳傳は正安三年覺如の作りたるものと傳へて居る故若し之を正しとすれば随分古くからあつたものと見ゆる、「拾遺古徳傳」の原本は今本派の本願寺に傳つて居ります、要するにこの問題は尙大に研究すべきものであります、さて右四つを數へました、四ヶ度宗論の中で、前二つは後の二つと大に趣を異にして居るのであります、初のは二つとも和平に起りて、平和に局を結び、特にある教義上の問題の研究の爲めに起つた事であつて、宗内の論議とさほど差別は見ぬのみならず、これが政治上に關係をもつ事も薄いのであります、應和宗論について見ても元來村上帝は佛教にあつき信仰をもつてゐらせられて、萬僧供養を起されたり、法華八講を始められたり、してあつき保護者でありまして、そこで研究の爲め南北の僧を集め論議を催されたといふに過ぎない、もとより南無佛教の衰へかゝりたる北嶺の盛なることによりて、その間に自から争はあつたであらうけれども、とにかく平

和の争である、また文治の宗論で假に實際存在して居つた事實として見るも、眞實なり法然なりが討論したといふ丈で、別に政治上からみて深い意味は有つたといふ譯でも無いのであります、之に反して次の二つの如きは最も其趣を異にして居るのであります。

そこで第三の安土問答といふは天正七年五月關東より浄土宗の玉念(靈譽)といふ僧が上りて信長の居城安土へ参り法談して居る處へ、法華の徒建部紹智といふものと鹽商の大脇傳介といふものとが、不審を懸けた處、靈譽のいふには若輩の者どもに説き聞かすもろのかいがないからろの二人の歸依せる法華のものよこしたなら説き聞かすべしといふ、そこで法華の方からも宗論致すべしとて京都から頂妙寺寂光寺久遠院妙顯寺堺の妙國寺等参り、五月廿七日に浄土宗の方からは右の靈譽大雲院の眞安(聖譽)と安土において法論をして、法華宗のもの詞に窮し終に詔證文を呈し、其後科料二百金を徴せられた、法華僧の普傳は列られ、建部大脇の二人も願をきられられた、「言經郷記」によるとこの時日蓮の徒千人計も群集してゐたので久遠院へ追こめられたといふ事、大變な騒ぎであつたのであります、その詳細は右の「言經郷記」を始めとし「信長記」「西教史」等に見え、文書にも桐生の浄蓮寺智恩院大雲院文書等に見えて居ります、詔證文もこの三ヶ寺の文書にあり、何れも本書ではなく寫しであり、文書は當時のものに相違ないといふこと、またこのときの袈裟は大雲院に存してあります。

天文法華の亂(松本問答)と寛永の品川問答

右の四の外に、尙注意すべき二つのものがある、天文の法華の亂と、寛永の品川問答とである、天文法華の亂といふのは、凡そ宗論の中で、最も慘禍を流した事の甚しきものであつて、日蓮宗の三大厄の一と、稱せられて居るものであります、う

附品川問答の偽作説

のが遺つて居るさうですか、これもまた材料とはならぬ、うしてその「品川問答記」をよく、穿鑿して見ますのに、さうも疑はしい廉が多いのである、まづ一通り目を通し見るに、うのかさぶりが、いかにも怪しい、一見して其文辭が疑はしく見えるのである、其内容については、まづ家光が品川にいつて、法論とさいたといふ程の事件であるから、當時の幕府の記録にはさうかと思つて見ても果せる哉、うんな影形も見えぬ、これ丈でもつて、この偽作なる事は、十分であります、尙よく搜つてみるに、まづ始めに、老中の名が掲げて堀田加賀守正盛、酒井讃岐守忠勝、久世大和守廣之、朽木民部少輔種綱とある、先づ堀田正盛、これは寛文十五年に老中となつたので、これは差支ない、次の酒井忠勝、之は寛永十五年に、既に大老となつて居る、しかし之は大老と老中とだから、ついで誤つたのだといひぬけも出来まじやうが、次の久世廣之が、之と同時に老中に列せられて居ると来ては、さつぱり御話にならぬ、この人は寛永より遙か降つて、寛文三年にはじめて老中となつたのである、この間寛永十九年から數ふれば、凡二十年も隔つて居る、さてこの次は朽木種綱はかつて、若年寄とまではなつたけれど、その後老中とはなつた事はない人である、また法論をした意傳といふ僧は、當時増上寺には見へ無い、これもつて見ても此書は、殆ど一顧を値しないのであるが、猶念の爲めにも一つ止めを刺しておくならば、この書の終に「從是浄土宗門疎遠遊ヲレ、御改宗トゾ聞タリ、増上寺ニテハ安カラスニ一大事ト騒動ス、其頃南光坊僧正比叡山ニ居ラレ此儀ヲ聞及バレ、早馬ニテ下リ登城ス、此度日蓮宗信仰御最ニ奉存候得共、浄土宗ノ儀ハ權現様御信仰被遊候ヲ僅三代ニ及ビ御改宗有テハ世々ノ聞エモ如何ニ奉存候増上寺儀ハ一通ニシ置テ法華宗御信仰ノ儀ハ天台法華宗ガ能御座候、日蓮宗ヨリ前ノ法華宗ニテ御座候、天台宗ヲハ信仰被遊可然ト御袖ニスカリ様々ニ御諫言有ケレバ、然レバトテ上野圓頓院御建立有之、東叡山寛永寺ト號シ南光坊僧正ヲ住職ニ仰付ラレ、是ヨリ東叡山ヲ御信仰被遊候トナリ」と

寛永六年の安土問答のとき

ある、これが最も笑ふべき事、家光が浄土宗をやめて日蓮宗にかへやうとしたら天海が天台法華をすゝめ、つひに東叡山を建て、もつたといふ、これで見ると寛永十九年の後に、東叡山ができたといふ事になります、天海はその翌年、二十年に死んで居るから、あまりに間にあつたといふのである、元來寛永寺は寛永二年に出来上つたのであるから、この宗論があつたといふ十九年よりは十七年か十八年か前に存在して居たのである、それをうの宗論の故に天海がだん／＼に説きつけて取立て貰つたなど、いふは其誤を辨するも愚の至りである、また右の文では浄土宗は家康が初めて信仰したと云やうに聞ゆるが浄土宗は徳川家先祖代々の宗旨であるから、これも誤りである、要するに本書は後世の偽作にかゝるもので畢竟品川問答と稱する事はうの影も形もあつて世に存在したことの無い者である、一口にいへば品川問答といふものは全然扶殺し了るべきものである、この外にも法論は所々の地方にかつ屢々行はれたやうであります、うの一二例をあげて見ますと、

寛永六年の安土問答のとき

一慶長六年に右の安土問答のとき、日蓮宗に勝つたといふ眞安が、阿波國にわたつて高野山の頼慶即その後慶長十三年とりも直さず今日の講題の宗論のときに、判者となつたものと宗論して負けたといふ事がある、これには一冊の「眞安問答」といふのがあります、

天文法華

の大略を一言しますと、天文五年の三月の頃、叡山の僧の花王院某が、京都一條鳥丸の觀音堂で、説法して法華宗を誹謗した、日蓮宗の松本久吉といふものか、聽衆中に居りまして、花王院と宗旨を論じた處、花王院終に負けて久吉は其法衣をばきとつて還た、山法師のものども大に怒り、久吉を殺さうとして追かけたけれども、及ばず終に幕府に訴へて、法華宗といふ號をかれらがつけて居るのは、其僭越であつて、天台法華の宗なる、我の方こそ眞のうの名をうくるものである、からといふので、法華宗の號をやめて、日蓮宗と改めさせたいといふことを、訴へた幕府では、之れを許さず、山法師は益々怒つて、法華宗徒を伐たうとして、諸國の末寺及び檀徒をよび集め、凡そ十萬の兵が、日蓮宗の寺々を攻めました、法華宗のものもまた、その徒を集めて戦ひましたが、終に大敗して京の二十一ヶ寺の日蓮の本寺は、之が爲めに悉く焼き拂はれ、死者三千余人と稱するほどでありました、京都の市街三分の一は之が爲めに、兵火にかかり、焼かれたといふ大さわざとなつた、この後はさしもの勢のはげしかつた、日蓮宗も、徴々として振はぬやうになつた、これが天文法華の亂一にまた、松本問答と稱する事件であります、之にはたしかな、記録がいろいろ存して居ります、

今一つの、品川問答と稱せらるゝものは、之れに反して、至極平和のものであります、うれば寛永十九年の二月十六日に、品川の本光寺へ家光が臨みまして、この住持日啓を召して、増上寺の意傳といふものと、法論をせられましたが、意傳が大敗したと、いふことであります、

の事のある條は別段に研究を要すべき事があるので、この八年の宗論といふ事實のあつたか否かは猶考ふべき事でありませぬ。これについては説もあるものでありませぬが、略しておきます。

さて以上を概括してみますと、應和の宗論をはじめとして數々ある中で、大原問答はその存日に疑はしき所あり、品川問答は全くない事なので、残るものは應和と天文の亂、安土慶長とこの四つとなる、この中で應和のは前にも申す如く極めて平和であつて、その意味が外のは大に異つて居る、政治に關係をもつことは薄い、この點で外の三つとは趣きを異にして居る、あとの天文の法華の亂、安土の宗論、慶長の宗論、この三つは最も注意を値するものでありませぬ、これからいよいよ本題の慶長宗論にはいるのでありませぬ。

(以下次號)

寄書

日蓮宗の迷信的崇拜物

高鍋玄洋

「恐らくは天台、傳教も、法華經の故に、日蓮が如く大難に値ひ玉ひし事なし、彼は只愚口、怨嫉ばかり、是は兩度の御氣、遠國に流罪せられ、龍口の頸の座、頭の疵、其外愚口せられ、弟子等と流罪せられ、籠に入れられ、且那の所領を取られ、御内を出たさる、是等の大難には、龍樹、天台、傳教も、争か及びたまふべき」

本化聖祖が、かく經文の句々悉く御身の上に踐み彰はして、よく經說、時節、法体、修行のすへてか符合したる上に、『日蓮と云し者は、去文永八年九月十二日子丑の時に、首刎

く無意義たらしめたのだ、否、聖祖を以て本化上行たる事を信しない者だ、否、宗門をして無一物たらしめたのだ、殺したのだ、亡したのだ、滔々たる現宗徒は、果して本門の本尊を以て本尊として、之を奉安し之に歸敬し崇拜しつゝあるか、寺院は如何、信徒は如何、

彼の寺院には必ず本堂と稱する者がある筈だ、寺としては必ず無くてならぬ、その本堂とは何れ何の用に立つるものなるか、何の爲めに要するのであるか、本堂とは本門の本尊を奉安すべき所謂『本尊堂』の事だ、乃ち法界唯一、世界統一の本門の本尊を奉安して、圓滿なる本化の信仰を涵養し増進する所の、最も神聖に、大に肝要なる道場の事だ、さるを現宗門寺院本堂の光景は如何、アレで本堂と謂へるか、今の所謂本堂なるものは、無用有害の神祠堂宇の附屬物で有るかの様な感じがする、あはれ本堂は且家の位牌を同棲せしめ、鼻の缺けた佛像や、邪神等を祠り立て、葬式をのみ營む葬式屋と化して仕舞つた、甚しきに至つてはその半面を以て貸家と同様に、何等信仰なき俗物共の住家として、たゞ夫れ家賃を巻上る事のみ汲々たる寺院もある、是を正しく本堂の神聖、否、本尊を無視したる宗賊行爲だ、何むと情けない宗門と化し去つた者でないか、既に寺院の多くですら斯くの任末だ、之に率ひらるべき檀信徒なるものが、本尊の大切なる事を打ち忘れて仕舞つて、今日の淫祠的、迷信的、病的信仰状態に陥つたのも、蓋し是れ自然の勢だ。

何にが何ひでも、現宗門の先決問題は、本尊の統一復古の一事に在るので、斷々乎として此一事と遂行せざる限りは於ては何事をも手に附かない、何むと云ふは宗門活動の原動力はたゞ夫れ信仰だ、即ち圓滿なる信の方だ、その信仰の客體たる本尊が乱れてからと云ふものは、恰も之れ航海船の羅針を失つたも同然だ、宗門をして今日の如く泣くへき悲状態に陥らしめたのも信仰が無いからだ、信仰なき宗門は生命なき宗門だ、生命なき宗門は滅亡だ、然り今日の宗門は精神的滅

られぬ、此は魂魄佐渡の國に至て……と、御自身の發迹顯本を遊された、即ち人の開顯が出来た、本法所持の大菩薩が顯れた、いで此の上は『日蓮が身に當る大事』を顯さむ者と、文永十年に『如來滅後五百歲始觀心本尊抄』の御著作が濟ひで、同七月八日に、佛滅後二千二百二十餘年之間、一閻浮提之内、未曾有之大漫荼羅を御顯顯に相成つたのが、所謂佐渡始顯の大本尊である、是を正しく未法の衆生、世界の諸人、上下貴賤、有智無智を嫌はず、必ず方々に奉戴歸命すべき、法界獨一、無比尊重、十界圓具の妙法曼荼羅である、

かゝる次第で顯發された御本尊であるから、建長五年の宗旨御建立の際には、三秘の事法を一本の本法に攝して、先づその總體を衆生に授與すべく、大賜を宇宙法界の代表者として、高く玄題を唱へさせ玉ふたのだ、爾來三類の強敵己に起り、刀杖瓦石の難既に身に蒙り、輕賤憎嫉の難既に身に集り、數々見擯出の難既に身に實證し了つて、爰に始めて之の本尊を顯顯遊はされたのは、天特に此本化上行に『時』と『處』とを與へたるものと謂つべきである、否、實体先に顯はれて解釋後に出つるの順序を稽へて、その宗化の孟浪ならざる事を知らしむるべく、本化聖智の然らしむ所であると確信する、

さればこそ、その御本尊の中には『如來の現在すら猶ほ怨嫉多し、況や滅度の後をや、法華引通の者、今世留難ある事、佛語虛しからざるもの也』と云ひ、『文永八年太辛未九月十二日、御勸氣を蒙り、佐渡の國に遠流せられ、同十二年太辛癸酉七月八日、日蓮始めて之を顯す』と宣ふたのだ、之の御讃文と拜讀せむ者、ただ夫れ日蓮大士は、本化佛屬の大導師たる上行菩薩であるとの、絶對の信仰にあらは、容易に神解了會し得らるべき事であらう、

かく容易く煥發せず、永く秘し深く藏めて、始めて染め出された、これ之の大本尊は、實に本化聖祖の生命である、聖祖の生命は即ち宗門の生命である、聖祖は此の爲めに艱難したまふたのだ、若し天れ宗徒にして本門の本尊を以て、信仰の絶對正境とせざるものが有つたならば、聖祖永年の法難をし

亡の宗門だ。

乞ふ血あり涙ある者よ、現宗門特に日蓮宗の崇拜物に就て觀よ、殆むと仕末に了へないあはれの光景でないか、『世界統一』とて大理想の下に生れた宗門が、何たる事ぞ、彼れ最も卑むへく惡むへき淫祠妖教たる、天理教、金光教會、さては蓮門教のそれと同一視せらるゝに至つたと云ふのは、畢竟、宗教の眞生命たる本尊の雜亂を顧みず、聖祖もその名を知り玉はさる最上稻荷、長榮ホックス等と祠るは素より、狐の穴まで崇拜せしむるに至つたからだ。

日蓮宗で最も別勸請として盛むるのは、彼の中山の鬼子母神をカッキ出して騒ぎ立つる彼の中山祈禱なるものは、彼等は聖祖の直傳だなどと自ら稱して居るが、全体ソレは何たる馬鹿げた話だ、聖祖がソんな馬鹿げた祈禱法などを、御苦勞千萬にも未法現代に残し置かれる筈がない、予は彼の常忍尊者に七十五通の符の相承が有つたと云ふ事は、事實だと云ふ事を記憶して居るけれども、今の所謂祈禱の形式と云ふものは、日祐と稱する人から始まつたので、而もその形式たるや、本化聖祖が折伏の大利刀を振つて亡國の邪法と叫び玉ふた、彼れ惡むべき眞言密部に依つた者で、すなはち外道から胚胎れた者だ、又此祈禱法は、最初は僅かに四十種しか無つたのだ、後ちに漸々と今日の如く増加し來つたのだ、兎に角、祈禱本尊鬼子母大善神とは、るも之れ何たるクワケを申なるのだ、本尊に祈禱と不祈禱との差別は無い筈だ、前にも一寸述べた通り、本尊とは、十界圓具の妙法曼荼羅にチャリント定つて居るのだ、もし之れ以外に本尊が二つ三つ四つ乃至五つも

六つも有つたならば、法界唯一、無比尊重の大本尊とは云へないのだ、

本化聖祖の祈禱と云ふものは、ソンの死靈や、生靈や、野狐、厄神や、狸や、猫などクツツイたのを、退散せしめたり落したりする様な、ケチ臭い祈禱でないのだ、それくらい不思議は、現今流行の催眠術で結構だ、何にも寒百日間御苦勞千萬にも、心にもない水行とやらを仕つて、鹿爪らしい小面倒臭い、祈禱の形式を用ひ、木輪をカチカチと狂氣の様に叩き、法華正行の題目を唱へる事は第二として、助行としての讀經にのみ力を用ゆるのみか、その讀誦の仕方といつたら口から出任せの閉間聲を張り上げて、丸で御經を怒鳴りつふすのだ、ト、のつまの効果は何だか云ふと、たゞ精神に幾分の壓制的、病的安心を與ふるのみで、生理上身体に於ては却つて害毒を及ぼすのみだ、おまけに信者の財布は空に成した上に、本尊は難難せしむる修行は統一せない、信仰は純一圓滿でない、甚だしきに至つて無垢の少女を姦し、後家を誦着し、人の妻を犯すが如き、是れ珍らしからざる、彼れ中山險者共の迷信的「祈禱御利益云云」の言下に、敢て成す罪惡である、若夫れ予をして險者の内幕をばかしかれば、忽ちにして三十疋や五十疋の法律の罪人は必ず現れるであらう、何は兎もあれ、彼の中山の祈禱法なる者は、催眠術がまず盛んに相成るにつれて、おはれむべし、今まで鬼子母神様の御利益杯と吹き立て、愚夫愚婦を難有たからしめて居たのも化けの皮が引剥けて、早晩中山祈禱法なるものは、催眠術を以て根底より破壊せらるゝであらう、

よし數萬歩を譲つて、鬼子母神を祈つて病的精神現象が治るとしても、その御本人たる鬼子母神は一体何者に依つて成佛したのだ、鬼子母神は素と人の兒を貪つた惡鬼だ、その恐るべき惡鬼も、一度妙法の光明に照らされたればこそ、本有の尊形と謂つて、難有い佛さまに相成つたのだ、聖祖は之を

十界の中、第二の餓鬼界の代表者として、十界圓具の本尊中に収め給ふたのだ、即ち鬼子母神は貪慾の最も盛むな者であつたが、その餓鬼の貧慾も本尊の力に依つて、行者を守らうと云ふ美なる菩提の方面に貪慾を轉活したから、佛となる事が出来た、如何に鬼子母神といへども、妙法曼荼羅に依らなかつたならば、到底、佛に成る事は相叶はなかつたのだ吾人行者も其通りである、鬼子母神が妙法曼荼羅に依つて成佛したまひし如く、吾人も亦た之を本尊(曼荼羅)とし之を修行した事ならば、祈らずとも鬼子母神は、吾人行者を守つて呉る誓約が、法華經第六の陀羅尼品に於て立てられて有る、即ち當然鬼子母神は行者守護の職責あるのだ、その報酬として何時も十界の本尊と云ふ難有い家の事の中に住むて、甘い妙法のお飯を食べて居らるゝのだ、吾人は兎に角、御本部たる本門の本尊にだに奉對して、一意専心題目修行を致せば、ソレで澤山だ、否、鬼子母神も此事を祈つて居らるゝのだ、本門の本尊を忘るゝ様な横着者があるから、鬼子母神も入用だ、ソレに今の人々はア、ココだ。大目的の本尊を打忘れて、道案内の一人たる鬼子母神を以て、祈禱本尊とは、全体何の事だ、そこに其様な御教へがある、聖祖大士は決してソンの事を教へ残されて居ない。(次號續出)

迷信に就いて

藤崎通明

凡そ教法に正法と邪法との二あると同じく、又信仰にも迷信と正信との二あり、迷信とは云ふまでもなく野蠻時代の遺物にして今日の如く智識發達進歩せる時代には絶滅せなければならぬ、正信とは時間から云ふ空間から云ふ十方世界に行渡つて不都合のない正しい信仰を正信と云ふのであるから、今日開明の時代には正信は益々鼓吹せなければならぬ、抑も宇宙間に棲息する物中人類は最も發達したるものにして人類已上に發達したるもの有り、未だ昔て聞かぬ、然るに人類中に賢不肖の差ある所謂古今に卓絶し偉大なる智識を有し人道の爲め盡され世界

の公利公益を圖り自利々他圓滿なるが故に生身も三世界の國尊佛ともなり聖人も云はれ、又は死後神にも祭られ人々之に向つて冥福を祈請するときは其の人の信仰深重なる佛神も感應ましくして幸福を下すことあり、古今其の類例少しとせず、宗教の誠心を要するは若し其の國の宗教が邪教にして迷信者流多き時は愚民を愚溺し爲めに測るべからざる疲弊を社界に與へ遂に國家の衰滅を招ぐことあり、豈に誠心せずして可ならんや然るに奇怪にも迷信家有りて人間より數等下劣なる動物野狐の如きものを崇拝するもの多きを見る人類未開の時代には宗教史上發展の順序として草木崇拜動物崇拜又は多神教、神教佛多神教一佛教は一度は經由すべき事實とするも一佛教が顯れてあらば大神の前の靈火と、他は何んの價値なきものである、殊に我國今日の現状は、野蠻未開の人類にあらず、世界の一等國と比肩し致して遜色なく日進月歩今や忠勇なる陸海軍の士は世界の大國と交戦し、連戦連勝世界各國の激賞するところとなる、然るに退て之が信ずる大國民の宗教は如何と觀察するに國民の大部分は未開時代の遺物たる最も劣等なる動物野狐の如きものを靈神として崇拝するを見る、元より我國は往昔より佛教隆盛の國にして八宗十宗競起し、就中本宗は六百有余年の往昔宗祖上人が終生迫害困苦世界人類の爲めに引められたる一團浮屠未曾有之大本尊の存するあり、我が國民に世界無比の大和魂の存する同一にして、豈動物野狐の如きものを依憑するの理あらん、經には十方佛土中唯一乘法と、人死して獲ある之を神と云ふ野狐の如き生前其の身自身を擁護する能はず死して後七萬物の靈長たる人類に向つて冥福をトすべきの理なきは三尺の童子も知ることを得、然るに不可思議にも帝都の中央に靈々附荷神社と稱し野狐の出入すべき穴二三を穿ち其上に社を建立し社前には白き狐數体を作り併列し、人、其の穴に向つて三拜九拜するを現に目撃したり、嗚呼祈禱する其の人の徒勞に屬するのみならず人道に對し耻づべきなり加之正一位按官附荷大明神の旗歌流を見て驚歎せざるを得ず、素より佛神に依り金錢物品を得んとする既に誤れり然るに錢綠地蔵あり本宗は疾くより此の如き迷信の具たる雜亂動靜は除去し、十界の本尊に歸命し未開時代の遺物たる野狐の如きものを崇拝するものなき我が國民多數の同胞が斯るものを信するは之れ全く傳道者の不注意に依るが國家の前途に向つて憂慮措く能はず聊か藉辭を陳するの意茲に在す

彙報

宗教家大會の趣意書

別項に記するが如く五月十六日に催されたる同大會が大會前に石川素重井上哲次郎本田庸一黒田眞洞佐治實然外廿四人の名を以て配布せられたる趣意書は左の如し

大日本宗教家大會開催趣意書

日露の戦は實に帝國の安全と東亞の平和とに關する一大事なり、この時に方我等は國力を擧げて平和の敵に當ると共に、又内に自ら大國民たる正大の雅量と愛ひ之を外に對て發揚するを要す、是れ即ち一文明を平和に求め列國と交誼を篤くして以て東洋の治安を永遠に維持するの大道を異致する道なりと信す
惟かに開戦以來我が軍の光輝ある活動と國民の譽買なる態度とは大に與國の同情を惹きたるものあり、然れども之を外にしてはははに乘じて、人種黃白の異同を口實とし、歐米に十字軍的思想を傳播する者有り、之を内にししては排外思想の爲又は教派的私情の爲に同様の言動を表はして、敵愾の心を偏局に走らしめんとする者あり、吾等宗教家たる者の盡すべきは此際、一方には各其の信仰によりて人心を導き、人をして安立と奉公の道を履ましむると共に、他方には各派傳來の別を離れ、博く人道の爲に盡し宗教の本義に基き、博愛平和の大道を擴張すべきに在り、即ち外は友邦の民をして、人種教派の偏見を脱して、我國の正義と平和の爲にこの戦を起したるの本旨を諒せしめ、内は偏狹なる新舊の教派反目的情を排除し、眞正なる舉國一致の上に光榮ある平和を克復するの道を講ずる可らず、蓋し和戰共に國民をして立つ所を覺らしめ、向ふ所を知らしむるは我等宗教家の天職ならずや、道教天職を果さんせば則ち先づ時局に對する各宗教家の意見を交換し、公正なる態度を表示せんかために宗教家大會を開催するは、蓋し下の急務たるべし若し此會合によりて正義と平和の爲に戦へる國民の正大なる意氣を明にし、此に依て宗教的、人種的偏見に出づる内外の迷夢を覺醒することを得ば、社會の福祉を増進する豈鮮少ならんや
此趣旨により我等相謀り、遂に大日本宗教家大會を開催せんことを、希くは江湖の宗教家諸彦等に我等の微衷を察れ來會の榮を賜ひ、この會合をして日本宗



教家の遠大なる覺悟と公明なる態度を内外に宣揚するの力を有せしめられんことを
明治三十七年五月

大日本宗教家大會の盛況

日露の時局に對して宗教家の公正なる意見を發表せんとて去月十六日芝公園淨土宗忠魂祠堂(舊彌生館)に開かれたる大日本宗教家大會は時節柄深く内外の同情を惹起し各一流の宗教家はいふまでもなく來賓、重なるは千家東京府知事尾崎市長を始めとして内外の紳士淑女無量千有餘人開會定刻頃は満堂立錫の地なく記者は開會に後る、こと四十五分にして到りしか普通人ははや入場を謝絶せらるゝ有様なりし
當日大會一致を以て決議せる決議案は左の如し

大日本宗教家大會決議案

日露ノ交戦ハ日本帝國ノ安全ト東洋永遠ノ平和トヲ書リ世界ノ文明正義人道ノ爲ニ起レルモノニシテ毫モ宗教ノ別人種ノ同異ニ關スル所ナシ故ニ吾儕宗教家ハ宗派人種ノ異同ヲ問ハス此ニ相會シ各自公正ノ信念ニ懇ヘ相與ニ奮テ此交戦ノ真相ヲ宇内ニ表明シ以テ速ニ光榮アル平和ノ克復ヲ見シコトヲ望ム

右決議シ之ヲ中外ニ宣言ス
明治三十七年五月十六日

大日本宗教家大會

右了て奏樂あり次に演説に移り平田盛胤、佐治實然、小崎弘道、村上專精、柴田禮一、大内青嶺諸氏の演説あり、黄色禍の迷想基督教國對佛敎國戰爭てふ誤解に向て極力打破する處あり満堂は時々敬意と賛意との拍手絶間なく次に祝辭として米人インブロー氏の英語演説あり(井深槐之助氏通譯)尾崎東京市長千家東京府知事の祝辭演説駿河臺ニコライ司教祝文朗讀書面若しくは電報を以て全國各地より送り越したる祝文數十通の披露あり演説者中尤も喝采を博せるは大内青嶺氏尾崎

は法の光を携帶し平安神社附近にて一萬部を配布したり
△五月五日午後金州丸遭難死亡者追弔法會を營み夜間は人種及宗教問題佛敎大演説會を開き候此夜來聴者數百名なかゝの盛會なりき

△五月八日午後川東寂光寺に於ては戰勝祈念出征軍人身躰健康の祈禱法要を田上僧都導師にて懇勵丁重に修し二時より法話あり小生は日蓮聖人と戰爭次に白井師は鳳凰城占領號外を携へ登壇號外に事よせ顯本主義の法話を爲し大に參詣者をして宗教思想を振起せしめられたるは國の爲法の爲に幸甚と云ふべし
(五月十二日鈴木孝碩報)

◎大阪敎信 日露開戦以來、大阪蓮成寺にては、彼の顯本講及び婦人會を提けて、時局の事に當れる人に對して、祈念、法話、慰問やら、又は犒軍のことに、應分の力を盡くし來りしが、殊にこの程、又中寺町、上寺町の寺院には、兵士の宿舎に充てられ、兵士を以て充滿するに至れり、されは一層の同情を深くして、萬事に心を付けて満足を與へ、又婦人會を出たして兵士の勞を犒らはしめ、殊に清瀬師は、兵士の忠勇氣烈に富むるの氣性を養ふ爲め、日課に用ゆる軍歌を作りて與へければ、隊長も大に喜び、日々の歩行軍歌に歌唱せしめ、元氣能く聞き得て、勇ましかりしと、又施本としては、一般の信者の便宜と信念の増進を祈る爲め、方便品、壽量品及び自我偈の誦讀を假名附にしてこれに回向文を附けて出版し、廣く希望の人々に類ち與ふること、尤も右要品の望みの方には、郵券(貳錢の)を封して(蓮成寺)に申込まるゝ向きへは、どれ程遠方へなりとも贈呈するとのことにて、この施本主は蓮成寺檀家、正價堂山本繁氏と、同檀家野阪孫作氏との兩家なり、山本氏の如きは七年前より未亡人となりたる人なるが、堅く節操を守り、商業は店員を督勵して、益繁榮を來たし、信念は益堅固にして増進し、大阪の信念界に於て多く得難き好個の婦人なりと云ふ、又野阪氏は元來越前出身の人なるが、最早大阪へ來りてより二十年以上にもなる人に

て、至つて物堅く、萬事言行相一致せる人なるより、非常に世の信用を博し、益事業發達せり、大阪活版界に於ても屈指となりをれり、氏は元來法華宗(本成寺派)の人なりしも、今回本宗に改めて信心の増進を致せり、言行一致は最も宗教の尊ぶところのもの、教ゆるところのものたり、益進めよや野阪氏、善を見習へよかし世上の人、
◎千葉縣第五教區敎信 同教區にては五月四日より五月二十三日に到る間に十一回の戰勝祈禱會及び演説會あり、其場所は大澤、柴名、桂、門の谷、太田、高田、東國吉、高倉、奈良上吉井、金剛地、等にして、區内各寺住職の出席はいふまでもなく、演説會の主任辨士としては伊藤實樹氏及伊藤憲洪氏専ら當り、特に大澤大澤寺に於ては同區長高石卯之吉氏等の懇請に依り、同區出征軍人高石良司外二名の爲に別時祈禱會ありたりといふ
◎全縣六教區通信 六教區布教員龜崎日憲氏主動の下に戰勝祈禱會を組織し二月二十日より五月十二日に到る間に於て十六回の祈禱會及び演説會を執行したるが重なる場所は宮谷本國寺田中法光寺福俵本福寺外十三個所にして今最近の模様を報道せんに
四月三十日増穂村能念寺に開會法要參列者石井渡邊石川田邊大野北田草切龜崎氏等にして午後
五月十二日福俵本福寺に開會法會參列者龜崎三原石川渡邊今井氏等なり午後
開會の詳
法華經の利益
今井 啓 敏
龜崎 日 憲

市長の二氏なりし右了て天皇陛下萬歳を三唱し散會を告げししは午後五時すぎなり當日は脇田堯惇氏本多日生氏も見うけたりき
◎京都通信 總本山妙滿寺に於ける四月中例會演説は十八日午後七時開會
本 定 鈴木孝碩
聖祖の祈禱主義 白井日憲
昔の聖祖今の花 山内日憲
同 情 野口義禪
大陸的 野口義禪
西陣に對する所感 鈴木孝碩
昔の聖祖今の花(其二) 白井日憲
大陸的(其二) 野口義禪
△本月二十九日我本山に於ては野口部長隨行者を引て本山を代表して伏見の第三十八聯隊へ慰問の爲め出頭し後備聯隊長瀧本美輝氏を慰問し各中隊へも慰問の辭を述べられたり
五月一日を以て木村義明兄歸東宗學院へ入學致され候氏は二年間本山に在りし熱心に布教部面に盡されしは一山大衆の深く感謝する處に御座候
同月三日小生と銀井氏と伏見聯隊へ出頭し瀧本聯隊長に面會の上蒙古退治の御本尊千九百二射と施本法の光千九百二部を呈呈致候聯隊長は曹洞宗なるも蒙古退治の御本尊の事とて大に歡喜せられ候翌日本山へ禮狀來れり
△當市中は三月以後勤儉貯蓄西陣問題やらで非常に不景氣の聲高かりしも頃日九連城と鳳凰城占領の號外手に入るや頗る市民の活氣を呼び毎夜提燈行列と樂隊やら屋根の上には電氣裝飾の聯隊旗を掲げ萬歳の叫び聲は天地崩る斗なり特に奉公義會の提燈行列は二萬人以上集合市中は紅提燈で埋められた様であつた我本山に於ても此の日空しく送るは我等の本分に非らずと協議の結果施本布教隊を組織し野口部長を始め諸氏

◎草生久成寺の庫裏落成式 同寺の庫裡は數年來頹敗して見

るかけもなかりしが、住職武聖麟氏鋭意改築の事を計られ、漸くにして工事を了り、いざ落成式といふに到りしも、時節柄見合せたらばよからんといひあひてのびくとなり居たりしが、さてあるべきにあらねばとて遂に四月二十日を期して落成式を挙行したり、當日組寺檀家等正午頃より参集し、尙少年隊の宗歌を唱ふるあり、來會者の祝辭演説あり、了て宴會に移り散會せしは日没すぎなりといふ。

◎吉ヶ原教信 吉ヶ原本經寺に於ては四月八日釋尊降誕會を兼て故日恭日梓師等の追吊會を營り、今、其模様を記さむに山名木信氏津山より來錫せられ檀家一同は朝來話さりの姿にて、丁寧なる法要後、山名高田兩師の説教あり、聽衆堂に満ちたり、當日該村の男女少年三十餘名か自我偈の調讀と誦誦して佛前を三匝せしは殊に目立ちて見へたり、こは信徒妹尾兼次郎氏か三十日前より毎夜熱心に此少年を集め教授せられし功に依るといふ。

豫告

日什 諷誦章講義

講師 阪本日桓師

右講錄整東次第本誌に掲載可致候也

山根顯道再校訂
顯本法華宗要品
並回向文

印刷鮮明 殊裁美麗

▲上等之部
用紙上等 實銀紙表紙、
一部印刷費 郵稅共拾八錢
十部以上 一部拾七錢の割
二十部以上 一部十六錢の割

▲並等之部
用紙、模造鳥之子、赤表紙、
一部印刷費 郵稅共拾錢
十部以上 一部九錢の割
二十部以上 一部八錢の割

此要品は顯本法華宗初心行者の爲めに校訂出版せしものにして、貳號活字總振假名附なれば如何なる老眼にても判明に如何なる婦女子にても『いろは』四十八字を讀み得る人ならば易々と獨習の出来る要本であります。

さきに出版した時は誤植が三四ありましたから今回悉く再校訂しました、のみならず品も上等と並等と二様に仕立てました。

實費にて頒與致します決して賣るのでありますから前金で御申越なさらなくてはお送りは致しません。

東京府荏原郡品川町南馬場
頒與所 **妙蓮寺**

岡山市上ヶ町

柿屋太物店

店主 久城茂太郎

岡山市上ヶ町 [電話貳六〇番]

吳服商柿屋本店

店主 久城茂太郎

京都市車屋町通柿屋路七

柿屋本店京都漆物部

店主 久城茂太郎

岡山市中ヶ町 [電話壹五八番]

柿屋鼈甲店

店主 宇垣卯三郎

岡山市上ヶ町

柿屋蒲團店

店主 久城梅

岡山市上ヶ町 [電話貳五五番]

柿屋南店

店主 久城龜吉

岡山市車屋町通り

柿屋北店

店主 久城清吉

統一



第百二十二號要目

(明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可 每月一回十五日)
(明治三十七年七月十五日發行統一第百二十二號)

- 勸信要義(承前)……………本多日生
- ▲釋尊研究論……………記者
- 諷誦章講義……………阪本日桓
- ▲清濁真雄師の意見書を讀む……………究 竟 生
- 御書時代の信念(其二)……………古定賢正
- ▲日蓮宗の迷信的崇拜物……………高鍋玄洋
- 思連記(承前)……………日達上人
- ▲佛教專門夏期講習會……………
- 日蓮大聖人(第十六回)……………關田佛城
- ▲本山に於ける法號授與式……………
- 慶長宗論批判(承前)……………文學士 辻善之助
- ▲各地教信……………
- 龍口夜半嵐……………古定不新

御

雛

附ぞく

人

形

小道具

武

者

東

人

羽

子

形

板

御注文に依り調製致候

東京日本橋通り十軒店

久月本店

中原福藏

(電話本局二千三百八十二番)

廣告

自今編輯事務も左記にて取扱ひ申候間原稿通信等凡て全所宛にて御送附を乞ふ

東京淺草區南松山町

統一團

- 一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
- 一本誌は一冊六錢 十二冊前金六十五錢 郵券代用は一割増但五厘切手を真とす
- 一購讀申込の節は住所姓名を附書にて認めらるべし
- 一爲替局は淺草區北松山町として御振込の事
- 一本團は別に領收書を發せす但し領收證を要する向は返信料を封入すべし或は爲替振込の節拂渡通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし
- 一廣告料は五號活字廿七字誌每一行金八錢なり

明治卅七年六月十五日印刷發行

發行所
編輯人 井村恂也
印刷人 山根顯道
印刷所 鈴木暉學
北澤活版所

東京市淺草區南松山町四十五番地

發行所 統一團

發行所東京市淺草區南松山町四十五番地